

The Bulletin of the Faculty of Global Communications

Cosmos



同志社大学グローバル・コミュニケーション学部機関誌

No.5

2016年3月

cosmos ['kɒzmos]

—①よく秩序づけられた宇宙。思考体系。

②キク科の観葉植物。

…花言葉 「調和」

cosmo- ['kɒzməʊ]

—（接頭語） 世界や宇宙に関する。

私は一つの可能性です。

私たちは無限の可能性です。

限り無く広がる世界の中で

調和をもたらす存在に成らんことを願い

これを題名とします。

References

Oxford Dictionaries. (<http://oxforddictionaries.com/definition/cosmos>)

流 希望 海 個 自 会

忙

界

道 進

動 漢

未

樂 波

交

輝

友

學

努 空

笑

Cosmos

No.5

— これらの漢字は、GCの学生たちが、
グローバル・コミュニケーションを
漢字一文字で表したものです。—



はじめに

この度はグローバル・コミュニケーション学部発行の学部機関雑誌 *Cosmos* 第5号を手にとり頂き、誠にありがとうございます。*Cosmos* は、多くの方々にこの学部の中身を知って頂くため、また、学部内の学生への情報発信を目的として学部開設と共に毎年発刊しています。

グローバル・コミュニケーション学部は2011年4月に同志社大学の13番目の学部として誕生いたしました。その名前のおり、近年ますますグローバル化の進む社会において要求されるコミュニケーション能力を多角的な視点から追求し、学生自らが主役となって「世界へ通じる対話力」を身につけることを目的としています。今年で6年目になる本学部では、社会人として巣立られた先輩方の活躍もよく耳に入ります。

さて、同志社大学で唯一の、すべてカタカナ表記のへんてこな名前（すみません。）の学部に入った学生は、やはりみんな大なり小なりへんてこなわけです。この学部に入り一年過ごしてみて思ったことは、「いろんな人がいるもんだ」ということです。大学とは一般にそう感じる機会の多い場所だとは思いますが、この学部は特にそうなのではないかと思えます。性格、価値観、好き嫌い、趣味、日々の過ごし方、目標、夢など、色々な点で、一言で言えば「生き方」がそれぞれ本当にバラバラで個性的な人たちが、同じ場所に集まって勉強し、会話し、交流を深めています。色で例えると間違いなく虹色な本学部ですが、何がすごいかというと、そんな私たちはみんな互いに尊敬し合える部分があることを知っている、ということです。それは同時に、互いに刺激し合える環境が整っているということです。この学部では授業の内容のみならず、へんてこで素晴らしい仲間たちとのコミュニケーションも確かな財産になると、自信を持って言えます。

そんな学生たちが作った本誌も、携わった人それぞれの色の詰まった、いい意味でへんてこな内容になっていると思います。編集過程では1-4回生間の学年とコースを越えた交流だけでなく、こちらも個性的で素晴らしい先生方のお話も聞ける活発なコミュニケーションの場が生まれました。本誌に携わってくださったみなさま、お忙しい中本当にありがとうございました。中でも、いつでも的確な指示や助言を下された4回生の河上晴香さんと廣江華蓮さんに、そして運営・編集委員の先生方に心より感謝いたします。

それでは、最後までお楽しみください。

英語コース1回生 笹野 美由紀

表紙デザイン 後藤 友莉
内表紙デザイン 谷口 綾

Cosmos 第5号

目次

グローバル・コミュニケーション学部の活動

自主サークル

- ①Fountain Commons 4
- ②JC グローバルブリッジ (JC国際桥梁会) 6

課外活動

- ①JUEMUN (日本大学英語模擬国連大会) に参加して ... 7
- ②31st International Youth Leadership Conference 8
- ③PCY (Peace Conference of Youth 2015) に参加して ... 9
- ④The Young Americans に参加して 11
- ⑤国際青年育成交流事業 (平成27年度 ラトビア派遣団報告) ... 13
- ⑥第14回「漢語橋」世界大学生中国語コンテスト 16

セミナー・プロジェクト活動報告書 18

対談

- 就職活動に関する悩みを解決します!! —3回生×4回生— ... 21
- 1年生対談 未来のGC生へ向けて 28

インタビュー

- ゼミの先生の思い 34

企画

- SA (Study Abroad) 先からのレポート 42

2015年度卒業研究テーマ 51

グローバル・コミュニケーション学部の活動

このコーナーでは、グローバル・コミュニケーション学部生が1年間行ってきた活動の一部を掲載しています。サークル活動、課外活動など日本国内に留まらず海外でも幅広い分野で活動している学生が多いのもグローバル・コミュニケーション学部の魅力であると感じております。2015年度活躍した仲間が沢山います!! 興味深い活動報告になっていますので、ぜひお楽しみください!!

桑原 菜々美

自主サークル

① Fountain Commons



Fountain Commons

【自己紹介】

はじめまして! 私たち Fountain Commons (通称 FC) はグローバル・コミュニケーション学部の1期生が作った国際時事勉強会サークルです。Fountain Commons という名は「知の泉」という意味で、1人の小さな水滴のような知識も皆の知識が集まれば泉のように湧き出てくるという想いで名付けられました。私たちの社会で起きる問題に模範解答はありません。FCは「社会に出る前に学ばべき事」をテーマに学生が主体となって企画・運営を行う勉強会です。

【実際は何をしているの??】

京田辺校地で週に一度お昼休みの時間を使って、国際時事の勉強会を行っています。毎回メンバーの中から1人を選出して話題の時事についてプレゼンテーションを行った後、全員でディスカッションをします。過去のトピックの例でいえば、「一体どうなっているの!?—シリア情勢—」「パリ同時多発テロ—世界どうなっちゃうのよ—」などが挙げられます。また「楽しい×学ぶ」をモットーにしていますので、それに沿ったテーマであればFCはどんな分野でも果敢に挑戦します。春学期には海外インターン支援を行っている方をゲストスピーカーとしてお招きして講演会を開催しました。夏休みの合宿では、海へ飛び込んだり、春学期勉強会の総復習クイズ大会も行いました。また、自己分析セミナーなどをはじめとする就活イベントも行うことで個々人が将来のキャリアを真剣に考える場となっています。





【FCの魅力】

FCの魅力を一言で表すと「人財」です。一人一人のメンバーがFCにとっての財産なのです。風呂敷だけを背負って世界一周した旅人、ダーリンは外国人、アメリカ横断しちゃう理系男子、現役柔道部ムキムキマン、噂のブロガーなどなど超個性的なメンバーが「オモロいことしたい！」と決起し、FCに集まりました。多種多様な個性を発揮する人々の中で、自分とは180度違う発想や意見を見聞しながら熱い議論を交わすことができます。そんなメンバーが集まっ

ているからこそ切磋琢磨し、互いに良い影響を受けながら成長できます。

【こんな人におすすめ】

将来世界で活躍したい人、世界の政治、時事に興味ある人、面白いことをするのが好きな人、ぶっこんでいる人、大学生活を濃いものにしたい人!!!!興味を持った方はFacebook, Twitterにて「Fountain Commons」で検索して下さい。

(文責 家志 千尋、加藤 聖人)



連絡先 グローバル・コミュニケーション学部 英語コース
家志 千尋
chihirokashi13@gmail.com

② JC グローバルブリッジ (JC 国際桥梁会)



大家好！私たち JC グローバルブリッジ (JC 国際桥梁会) は「グローバル化は隣国から」、「平和は友達作りから」、「未来を担う学生の交流」という3つの理念の元、活動している同志社大学京田辺キャンパス唯一の日中交流サークルです。

週に一度、日中交流会（中国に興味のある日本人学生と日本に興味のある中国語圏の学生が交流する会）を開き、月に一度イベントを開催しています。交流会では簡単なゲームで盛り上がり、スタッフのプレゼンテーションを聞きそのテーマに沿ってみんなで話し合ったりと、毎回有意義な時間を過ごせます。話し合いのテーマは方言、結婚、夢、無人島からの脱出、などなど多岐に渡っています。イベントでは普段の交流会の枠を越え、更に深く日中文化を理解するための活動を行っています。

語学力は一切不問です！中国語圏、中国語に興味さえあれば、どなたでも楽しみながら新しいことを学び、友達作りができる場を整えています。違う環境で育ってきた人達とこんなに深く交流できるのは学生の特権だと思いませんか？みなさんもぜひ一度遊びに来てください！

(文責 山口 彰吾)



連絡先 グローバル・コミュニケーション学部 中国語コース
山口 彰吾
shogo2japan@yahoo.co.jp

課外活動

① JUEMUN (日本大学英語模擬国連大会) に参加して

私たちグローバル・コミュニケーション学部英語コースでは、3年次に Advanced Communicative Performance という授業を受講します。Calum Adamson 先生が担当するクラスでは、学生が世界のある1ヶ国の代表者となりその国の視点から様々な国際問題について考え、それに対する解決策を議論し合うという形式をとっています。そして実際の国際連合総会での会議の進め方を学び、国際情勢をさらに深く知り、また各国の立場で主張、交渉することを経験できる場として Adamson 先生が機会を与えてくださったのが、2015年6月26日(金)～28日(日)に行われた JUEMUN です。JUEMUN とは Japan University English Model United Nations の略で、日本語では「日本大学英語模擬国連大会」と訳されています。2010年に名古屋で第1回大会が開催され、今年度は近畿大学主催のもと大阪で行われました。第6回目となる今年のテーマは「平和のための文化の醸成」で、30ヶ国・地域の47大学から277人(うち海外26大学・77人)の大学生が結集し、3日間世界中の多様な価値観に基づき、国際問題について英語による熱い議論が繰り広げられました。

今回の参加者は、女性の平等と地位向上、民族集団と文化の保護、性的搾取を伴う人身売買の問題、紛争における子供の保護という実際の国連でも取り扱われている、どれも複雑な4つのテーマ表題のもと議論をしました。それぞれのミーティングルームに分かれ、さらにその中でも地域ごとのブロックやより細かなテーマについて話し合うグループに分かれたりしながら、それぞれのテーマ表題について議論を重ねました。JUEMUN 本番以前から、参加者はポジションペーパーという課題に取り組み、まず自分が代表を務める国についての基本的な情報、与えられた表題についてのその国における問題とその解決策の徹底的なリサーチを行いました。これを通して、本番での議論がより意義のあるものになっただけでなく、各個人がその国の人々に共感したり、深刻な状況を回復させるには何ができるか考えたりなど、国際社会の一員として協力的な姿勢をもつことの重要性に気付く良いきっかけとなりました。3日間で具体的に行ったことは、自分が準備したポジションペーパーに基づいたスピーチ、地域ごとの自らが担当する国の情報の共有、各グループでの特定の問題に対する話し合い、その解決策の提案書の作成、そしてそれらを採用するかどうかの投票などです。3日間という限られた時間の中で参加者は結束力を高めながらベストの結果を求めて奮闘しました。

私はこの JUEMUN を通して、世界中の様々なバックグラウンドを持つ学生たちと出会い、決して容易で



はない国際問題について議論し合うという、滅多にない貴重な経験をさせていただきました。中にはJUEMUNに向けて何ヶ月も準備してきたという学生もあり、彼らの情報の豊富さ、積極的な発言力、そして議論を円滑に進める率先力には圧倒されました。私は自分の書いたポジションペーパーには自信があり、リサーチも十分にしていたのですが、それを議論で有効活用できるだけのディベート技術、議論での発言力も同時に持ち合わせておかないといけないと痛感しました。このように自分の弱点を知ることができましたが、何と云っても最後に共同声明が発表されたときの達成感は計り知れないものでした。そこに到達するまでの不安・緊張・感動・楽しさ・悔しさといった感情も大変思い出深いものです。GCの後輩のみなさんはもちろん、JUEMUNに少しでも興味のある方は今後ぜひ参加してみてください!!

(文責 小川 貴帆)

② 31st International Youth Leadership Conference

英語コース3回生にはAdvanced Communicative Performanceという授業があり、各自5つのクラスから最も興味のあるテーマを扱っているものを選びます。私が受講したMarie Thorsten先生のクラスでは、国際連合を始めとする国際組織について学びました。そしてThorsten先生の推薦のおかげで、プラハにて1週間かけて開かれるジュニアの国際会議(31st International Youth Leadership Conference)に参加する機会をいただきました。その会議は「今の国際社会で求められているリーダーとは何か」、「リーダーになるにはどうしたらいいのか」について、国境を越えて若者たちが意見交換し未来のリーダーを育成することを目的としています。2016年1月初め、この会議に参加するため私達8人がチェコへ飛び立ちました。

ケニア、香港、ドイツ、南アフリカ、インド、コンゴ出身の学生達がプラハに集まり、まず始めに5つの大使館(オーストリア、ノルウェー、モロッコ、ドイツ、中国)を訪問しました。そこで外交官の方から実際されているお仕事についてお話を伺い、国際情勢についても話し合える貴重な経験をさせていただきました。アメリカンセンターでは「持続可能な開発目標」についての学生による発表があり、貧困や性差別問題について議論しました。また、模擬国連や国際刑事裁判所における模擬裁判を通じて、国際的組織のリーダーが実際に感じていると思われる問題解決の難しさを体験することができました。グ

ローバルマーケットを展開している2つの企業にも訪問させていただき、政治的側面からだけでなくビジネスの側面からもリーダーに必要なものを学べる機会となりました。





朝から夜まで予定の詰まった会議であったため、とても有意義な1週間を過ごすことができました。出身国の違う同世代の学生達と英語で交流し仲を深められたことがなによりも刺激的でした。自分の無知さを痛感し、新たに多くの知識を得られたことに加え、留学中は当たり前に行っていた異文化交流の大切さを再認識できる非常に貴重な体験となりました。プラハという町自体もとても美しく、世界史好きな私にとってプラハの町を歩けたことは嬉しかったです。会議に参加する機会を与えてくださった Thorsten 先生に改めて感謝したいと思います！

(文責 上田 実佳)

③ PCY (Peace Conference of Youth 2015) に参加して

「平和問題解決の難しさを目の当たりにした1週間」

私は2015年8月下旬に約1週間の国際平和会議に参加しました。参加のきっかけは所属しているゼミの竹田宗継先生からの案内です。難民増加のニュースをよくテレビで見るとなると難民問題に興味を持つようになったこともあります。実際はあまり内容も分からないまま、カンボジアに行けるということだけで参加を決意しました。

PCY は世界平和実現のために主体的かつ積極的にアクションを起こすことができるリーダーの育成を目的とした JCI (大阪青年会議所) 主催のプログラムです。2010年から毎年行われているプログラムで、世界各国から次代を担う学生を募集し、世界平和について学び、気付きを得ることができる機会を与えます。2015年度は「持続発展可能なしくみで貧困の問題を解決」というテーマでした。

まず朝7時に関西国際空港集合という過酷なスケジュールから PCY は始まりました。カン



ボジアの首都プノンペンに3日間赴き、JCI カンボジアの方との交流、現地小学校でのボランティア、貧困層が住む村を見学、様々な NGO/NPO 団体の訪問などを通して、普段感じられない気持ち味わいました。平和で豊かな国、日本で何の不便も感じずに過ごしてきた私にとって、小学校や村で見た景色や人、雰囲気というのは言葉で表現できないものでした。特に印象に残っていることは小学校で見た生徒の目の輝きです。学ぶことが楽しくてしょうがないと訴えてくるようなキラキラした目で見つめてくるのです。私は現地の小学生に「あっち向いてほい」を教えたあげましたが、あれほどはしゃいでその単純なゲームを行う子供は初めて見たというぐらい、ものすごく楽しんでくれました。私自身その生徒の姿を見たときなぜか感動しました。

3日間のカンボジア滞在を終えたのち、大阪に帰ってきて様々な国から来た10名の留学生と交流しました。1日の大阪観光を通して交流を深め、残り3日間は最終日に行われるフォーラムでのアクションプラン発表に向けての会議が続きました。持続発展可能なしくみで貧困問題を解決するアクションプラン作成のために、世界の現状、カンボジアで見た問題点、具体的なプランを構



成するという順番で会議を進めていき、毎日夜遅くまで議論を続けました。言語の壁（英語を上手く話せない参加者ももちろんいました）、意見の対立、文化の差、長時間会議による疲労により何度も対立し、会議が上手く進まないことが何度もありましたが、フォーラムの日が近づくにつれて一人一人の意識が高まり、互いを尊重するようになりました。私自身も何度も投げやりな気持ちになりましたが、その時は同じチームメンバーに何度も助けられました。そしてカンボジアで見た小学生の目の輝きが忘れられず、あの子達の将来を変えたいという気持ちが私のやる気になっていました。そして「ハッピーボックス」というお弁当屋さんを作るといったアクションプランを完成することができました。案がまとまった瞬間、フォーラムで発表を終えた瞬間の達成感は今でも忘れられません。

きっかけはふざけた理由だったかもしれませんが、私はPCYに参加して良かったと心から思っています。世界の現状、平和問題解決の難しさを目の当たりにしただけでなく、異文化・異言語を持つ人々との意見交換の難しさをPCYで感じました。そして世界の問題についてだけでなく、会議の際にもこの悪い現状はどうすれば改善されるのか、どうすればメンバー全員が1つにまとまるのかなど考えることも多くありました。ただお互いを尊重し合えば、困難を乗り越えて1つのまとまったものを作り出せるということも分かりました。PCY参加前は自分の意見にこだわるという性格であった私も、参加後には広い視野を持ち、相手の気持ちを考えることができるように成長することができました。素晴らしい機会を与えてくださった、竹田先生、JCI大阪のみなさま、PCY2015メンバーに感謝の意を表したいと思います。

(文責 桑原 菜々美)



④ The Young Americans に参加して

Hello! 吉田優子先生の紹介でキッズサポーター（以下KS）として参加させていただいた、The Young Americans のジャパンツアーについて紹介させていただきます。

まず The Young Americans（以下YA）って何だろうと思う方も多いと思いますので、彼らについての説明をさせていただきます。YAは1962年に若者の素晴らしさを音楽によって社会に伝えようと、ミルトン・C・アンダーソンによってアメリカで設立された、音楽公演と音楽を通じた教育を活動の2本柱とする非営利活動団体です。YAのメンバーは17~25歳の若者たち約300名で構成されています。アメリカでは数多くの音楽番組に出演、6人の大統領から招かれるなど、歌やダンスそして楽器演奏など数々のパフォーマンスを行ってきました。2001年からはヨーロッパにもその活動拠点を広げています。

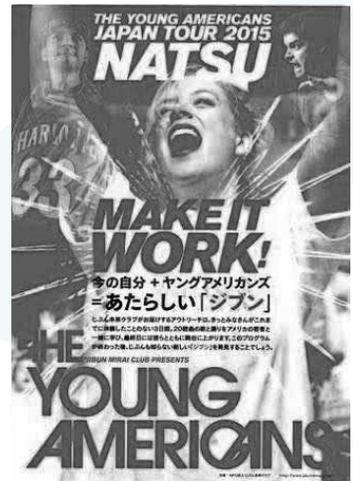
そんな彼らが日本にやってくるきっかけを作ったのは、「アウトリーチ」と呼ばれるYAによる教育活動を知り、1人でも多くの日本の子どもたちとYAとの出会いの機会を作りたいと考えたNPO法人じぶん未来クラブの代表佐野一郎氏でした。佐野氏の強い思いにより、2006年2月18日に日本で第1回目のアウトリーチが開催され、今年でこのJAPAN TOURも9年目を迎えることになりました。

彼らのアウトリーチの内容は、学校やコミュニティを訪れ、小・中・高校生たちと一緒にわずか3日間（地域によっては2日間）で歌やダンスのショーを作り上げること。最終日にはYAが第1幕を演じ、そして第2幕では参加者の子どもたちがYAと共演し、ご両親、友達、先生方や学校関係者を驚かせることになるわけです。世界共通言語である音楽を通して数百人の子どもたちが共に学び、お互いの強みを尊重し、自分の可能性を発掘することを目的としています。

ここまでがYAとその活動についての説明だったわけですが、今からお話するのは私が参加させていただいていた、アウトリーチを運営する役割の一つであるキッズサポーター（以下KS）について紹介させていただきます。



KSとはその名の通り、アウトリーチに参加する子供たちをサポートする存在なのですが、その仕事は非常に多岐にわたります。アウトリーチの参加者は基本的に小学校1年生から高校3年生の数百人になるので、練習中に集中できずみんなの輪から抜け出してくる低学年の子や体調を崩す子、ダンスや歌を覚えるのが苦手な子などについていけず泣き出す子などがでてきたりすることが珍しくありません。しかし先生は初めて会った外国人。自分の思いをうまく伝えることができずに我



と英語だけで行われることもあります。そうすると、英語のわからない子供たちには指示されている内容がわからず困惑することになります。反対に講師である YA も日本語を勉強しているわけではない海外出身の若者たちなのでお互いに意思疎通ができないという事態が発生します。そんな彼らの間に立つのが私たちというわけです。ほかにもまだまだたくさんありますが、1つ言えるのは KS の仕事は縁の下の力持ちでいることで、主役はあくまでも子供たちと YA であるということです。

今回関西地区で行われたアウトリーチのお手伝いをさせていただいたのですが、この経験を通して感じたのは、たとえ言葉が違って音楽を通して人は繋がれるのだということと子供たちの持つ力のすごさです。ある開催場所では、参加者の中に多くの児童養護施設の子供たちがいたことがありました。彼らは、最初のうちはどうしても積極的に参加できず、話しかける私に笑顔を向けてくれることも少なかったのですが、3日間のアウトリーチで YA と交流するうちに、最終日にはどの参加者よりも元気に歌って踊りその場にいることを楽しんでいました。そんな彼らを見て私も元気をもらうことができましたし、あらためて今回参加して3日しんどかったけれどもがんばってよかった、音楽ってすごいな、と思うことができました。

YA はまた2016年の春にやってきて、日本中をまわります。もし少しでも興味を持っていただけたのならば、一度 KS としてアウトリーチ運営に参加して、彼らの情熱、音楽に触れてみてください。そこでは言葉にできない感動と達成感を感じることも間違いなしです。

(文責 青山 祥穂)



⑤ 国際青年育成交流事業

私がこの夏季休暇で参加したのは内閣府が主催する「国際青年育成交流」というプログラムです。毎年3ヶ国に30歳以下の若者を約2週間海外に派遣し、グローバル人材を育てるというものです。私がこの事業を通して得たものは計り知れません。特に、私は幸運にも日本代表青年に選ばれ、皇太子殿下の御前で英語のスピーチをするという名誉な機会もいただき、自信ができました。ぜひ皆さんに、特に留学から帰ってきた方におすすめしたいです。下記のもは私が実際内閣府に提出したレポートです。よろしければ読んでみてください。興味がある方は私に連絡をとってください。いつでも質問を受け付けております！



◆平成27年度 ラトビア派遣団報告

色褪せない思い出

中西 千尋

曇りない目で

「全くイメージがない」というのが、私がラトビアに関心をもった最初の理由だった。インターネットが普及し、メディアからありとあらゆる情報を毎日受け取っている私たちは、たとえ行ったことがなくても、ある程度他国の知識・イメージを持っているだろう。しかし、「ラトビア」という1つの国の名を聞いたとき、私の言葉に浮かんだのは「バルト三国の1つ」という高校世界史で学んだごくわずかな知識のみであり、その国についてのイメージがなかった。デジタル時代の中で、名前は知っているある国に対して何のイメージも湧かないというのは稀に思った。同時に、今まで興味をもって能動的に調べなかった自分を恥ずかしく思った。自分がいかに外の世界に無関心であったか。

また、私が1年間のアメリカ留学で学んだことは、「行ってみないと、会ってみないとわからない。情報ばかりで実際の経験のない人に、ある国やその国民について語る資格はない」ということだ。イメージがないというのは、よく言えば偏見もないということだ。曇りない目で確かめたい、行ってみなければと決意した。

グローバル人材

今日いろいろなところで「グローバル人材」という言葉をみかける。正直、私はこの単語の意味をはっきりと捉えることができていない。世界に出て英語をしゃべればなれるのか。他国とビジネスをできる人間になれば、それはグローバル人材なのか。いずれにせよ、異文化に接触したときの対応・振る舞いといったものが問題なのだと思う。この事業をきっかけに、この言葉について私は思考を深めた。

異文化交流の際には大きく2つの側面がある。受信と発信である。意識的であれ、無意識のうちであれ、異なる背景をもつ国、国民と関わっていけば自然に起こっているものだと思う。まず、

相手の文化を受け入れる側として大切なことは何か。よく言われることでもあるが、私が思うに、相手の文化が自分のそれとは全く異質のものであっても拒絶しないことだ。違いを単純に違いとして受け取ることが大切だと思った。また、「〇〇人は～だ」というように、簡単に一般化してしまうのもよくない傾向に思う。偏見というものは実は誰しもが持っているもので、それは頭の中から簡単に消し去ったり、取り除いたりするものではない。しかし、その物事についてより深く知ることで、小さくすることはできる。

違いを楽しもうという気概があり、自分の頭の中で勝手に膨らんでいったイメージに基づいてではなく、目の前にいる生身の人間に接してその時々で判断していける人は、グローバル社会で活躍していける人の質として必要なのだと思う。

発信者としてはどうか。そもそも、自分という存在が凶らずも、自国の国民性などの何かを発信してしまうことに気が付くべきだと思う。上で一部のみを見て一般化してしまうべきでないと述べたが、実際は自分に関わった人の行動・態度から「〇〇人」のイメージを作り上げるのも事実だし、間違っていない。私のやることは、私が日本人である以上、日本人のイメージとつながっても間違っていない。だからこそ、ラトビア滞在中は、常に自国代表としての自覚をもって恥ずかしくない行動を心掛けた。さらに、自分の母国の美しいところを発信していきたいと思っていたのだが、これが案外難しかった。ラトビアという美しい小国に魅せられ、思わず「日本もこんな風だったらいいのに」と思ってしまったのである。グローバリゼーションの悪い側面の1つは、あらゆるものを均質化してしまうところだ。他国の文化に魅せられ、良いところを取り入れるのと、自国の良さを忘れてかぶれてしまうのは別である。そのことを強く感じさせられた。つまり、異文化の良さを認め、そこから何か学べないか模索しつつ、自国のアイデンティティを誇りに思い、強く持ち続けられることも、今日の社会では必要なことではないだろうか。

歴史の爪痕

ラトビア滞在中一番耳にした話題はロシア系住民との関係性だ。これは、もちろん第二次世界大戦時の歴史と深く関連する。地理的にロシアとドイツという強大な2ヶ国の間に位置したラトビアは、長年その支配下に置かれてきた。最終的には旧ソ連に組み入れられたのだが、そのときの統治策により、多くのラトビア人が連れていかれ、その大半が故郷には帰れず、国の人口が半分ちかくなってしまったこと。物価の安くなったラトビアに大量のロシア人が移民してきたこと。これらが、今日の民族問題の根幹にある。この背景を知ったとき、歴史が残す爪痕というのは後になってあらゆる問題を引き起こし、しかもなかなか消えないものなのだと感じた。やはり、未だにロシア人のことをラトビア人は心の中で恨んでいるかもしれないと思った。しかし、現地出会ったある友人の意見にはとても感心した。私がロシアとの歴史についての質問をしたときに



彼女が言ったのは、「戦争中は、皆が悪かったのよ。ロシア人だけじゃない。もちろんロシア人はたくさんの酷いことをしたけど、きっとラトビア人だって生き残るために汚いことをしたに違いない。それが語られていないだけよ。だけど私はどちらも責める気はない。なぜなら、あのときは戦争中で、きっとどうしようもなく、それぞれが生き残るために必要な選択をしたのよ。あのとき、皆が生きるために正しいと思えた選択をしたまで。経験していない

私たちにはわからない。だから、過去のことをいつまでも拘って、私たちがいがみ合うのは馬鹿げてる。だって私たちはもう彼らではないのに。」そんなことだった。彼女の言うことがすべて正しいかはわからないが、とても公平な立場から歴史を見ているように思う。こういった考えを持っている人が増えれば、世界中で起きている国家間関係の問題も少しは進むだろうと思う。しかし同時に、この意見は、身近に民族問題と向き合っていかなければならない状況にあった人間だからこそ持ちえたものにも思える。いずれにせよ、こういった複雑な事柄に関して、自分の立場を明確にできるというのは見習わなければならない点だ。

また、私はこの民族問題がいかに複雑で大きくて身近な問題か、実際にラトビア人と話して初めて知った。日本人は単一民族だという説はすでに否定されているにせよ、民族問題というのは私たちの中で大きな問題にはなっていないように思う。日本にいれば、大体の人間が日本語を喋るから、言語についても問題がない。しかし、ラトビアではロシア系だというだけの理由でいじめられたことがあるという友達が何人もいた。言語“mother tongue”と“first language”が違っている人たちがたくさんいた。彼らが自分を何人とみなしているかも、意見はまちまちだった。両親は日本人で、日本に生まれ、日本語だけで生活してきた私にとって、この問題は想像しかできない。アイデンティティが1つだけの国に由来しているから良いとか悪いとかはないが、当たり前のことではないのだと自覚した。そういった問題で悩まずに済んできたから考えてこなかった自分の母国というものをもっと考えるようになった。私には母国といえば日本しか浮かんでこない。ならば、日本の文化をもっとちゃんと勉強して、世界に出ても日本人として恥ずかしくない人間になろうと思えた。全く異なるバックグラウンドから生じる問題について知ること、自分が今まで思いもよらなかった物事の側面を見られるようになった。他国を知って、自国を知るといふ1つの例だろう。

カラフルな「色鉛筆」

ラトビアで得た数多くの貴重な体験の他に、私がこのプログラムで得た大切なものは仲間だ。私は団長・副団長と自分を含めた他14人の団員で構成されたこの団で過ごした時間は、一生胸に残る記憶として刻まれている。もちろん、全て何の問題もなく終わられたわけではない。プログラムも終盤へ折り返そうという頃、疲れも溜まり、毎日にメリハリをつけることが難しくなって、中だるみしてしまった時期もあった。しかしプログラム終盤を迎えつつあったある夜に、団員でそれまでの振り返りを行い、気を引き締め直せた。「自分たちは一体何のためにここに来たのか。何を得られるのか。」という原点に立ち返れたことで、残りのスケジュールをこなせたと思う。

「何を」経験するかは、「誰と」それを共有するかによって決まると言っても過言ではないように思う。同じプログラム内容だとしても、一緒に学び、感じるメンバーが違えばその質も変わる。



この団は皆向上心と思いやりのあるメンバーばかりだった。私たちの団としてのコンセプトが、「笑顔溢れる色鉛筆がラトビアと日本の未来を描く」であったように、団員それぞれに「色＝個性・強み」があり、様々な分野における他のメンバーの知識や考えを聞くことで、私の見聞は広がった。何か大きな課題を共に乗り越え、特別な絆で繋がった大切な仲間との出会いに感謝である。

またこの素晴らしいプログラムを脈々と受け継がせ、私たちが少しでも多くの意義深い経験をできるよう尽力して下さった全ての方に、心からの感謝とお礼を申し上げたい。本当にありがとうございました。

(文責 中西 千尋)

⑥ 第14回「漢語橋」世界大学生中国語コンテスト

「漢語橋」世界大学生中国語コンテストは、中国語のスピーチなどで順位を競う世界的なコンテストです。毎年中国で行われる決勝大会（この大会の様子は、中国で大々的に全国放送されます！）に向けて、中国語を学ぶ世界各国の学生が熱い戦いを繰り広げています。日本ではメインとして西日本・東日本地区に分かれて予選大会が行われていますが、今回はその2015年5月24日に行われた西日本地区予選大会について少し振り返りたいと思います。



大阪産業大学孔子学院の主催によって行われた、第14回「漢語橋」世界大学生中国語コンテスト西日本地区予選大会では、和気藹々としたムードの中12名の出場者が日頃の中国語学習の成果を披露しました。コンテストの内容は、

- ①暗誦による中国語のスピーチ (3分)
- ②中国に関する知識を問うクイズ (3分程度)
- ③中国文化に関する特技の披露 (5分)

となっており、一般的なスピーチだけでは乗り越えられないのが「漢語橋」の難しさであり、面白さであると言えるでしょう。中国文化の披露では、中国語での歌唱や民族舞踊、書道の実演などがあり非常に盛り上がりました。それぞれに審査基準があり、最終的に総合得点で順位が決まります。特等賞に選ばれた1名は、西日本地区の代表選手として7月に中国湖南省長沙市で行われた第14回「漢語橋」世界大学生中国語コンテスト本大会（準決勝、決勝）に出場しました。次に1等賞受賞の1名も、同コンテスト本大会（準決勝、決勝）の見学及びサマーキャンプに招待されます。

就職活動等で忙しいし、コンテストに出る余裕なんて…と思いながらも、私が出場を決めるのにそれほど時間はかかりませんでした。中国語と出会って10年以上経った今、自分の想いを共有できる最初で最後のチャンスだと思いました。スピーチでは『中日的桥梁（日中の架け橋）』というテーマでこれまで経験してきたことや日中友好・日中理解について話しました。いわゆる“コンテスト向き”の内容でも何でもなく、ただ自分の過去を振り返り、現在の心境と結びつけただけの簡単なスピーチでしたが、それでも私にとっては10年間での喜びや苦しみが一瞬で蘇るよう

なそんな重みがありました。結果、郭先生をはじめ多くの人の応援のおかげで1等賞を頂き、同志社大学初の出場者として良い結果を残せたことを非常に嬉しく思います。そして何より、これまでの人生で私が出会った中国人の先生方・友人に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

今後ぜひ後輩の皆さんにも「漢語橋」に挑戦してほしいと願っています。順位を決めることだけがコンテストではないので、本当に軽い気持ちで参加すればいいと思います。ただ、参加した人は参加していない人より何十倍も成長できます。たくさんの「お土産」を持たせてもらえるだけでもラッキーです。やったことのないことをやることは、机上の勉強よりもずっと価値があり、新しい人と会うことは、人生を豊かにさせるし、これが人間生きていく上での基本だと思います。「漢語橋」に限らず色々な経験をして、その中で自分の幸せや成長を感じながら、充実した日々を過ごして下さいね。

(文責 二口 あかり)



セミナー・プロジェクト活動報告書

セミナー・プロジェクトとは？

セミナー・プロジェクトとは、本学部4回生英語コース・中国語コース・日本語コースメンバーが作り上げる、大学4年間の集大成とも言える授業です。必須の留学やこれまでの学生生活での学びを生かし、試行錯誤を重ね、1月18日（月）5、6講時に「2015年度セミナー・プロジェクト最終成果発表会」を実施しました。活動内容・苦勞・学び・成果を発表し、共有する機会を持ち、各賞受賞班も決定されました。この記事では、各プロジェクトのメンバーからの活動報告を紹介します。今年度のプロジェクト一つ一つにも、個性が光ります。文面ではありませんが、楽しんで頂けると幸いです！

最優秀賞受賞「フェアトレードによる国際協力の実践プロジェクト」

私たちは「フェアトレード（以下FT）を広めて実践してもらおう」を共通の目的とし、機動力確保のため4班に細分化して活動した。そもそもFTとは、途上国の商品を適正価格で購入し、現地生産者達の生活改善と自立を促す貿易のことである。推進対象とその媒体を私たちは特に意識しており、将来を見越して児童を対象に啓蒙する班、従事者と連携して大学生向けのイベントを企画する班、FT 珈琲や雑貨を扱う店をHP上の地図にまとめる班など、個性が光った。班ごとの行動が多く、メンバー間で情報の共有が難しかったが、授業の最後に進捗状況を報告し合うなど工夫した。4班どれも盛況ではあったが、ここではYelp 班のFT ココナッツオイル体験会を紹介したい。大手ローカルビジネスレビューサイトYelpとコラボしたこのイベントは、リラックスできる雰囲気の中で、FTを伝えたいという想いから60名限定で参加者を募集した。効果的なオイルの利用法を紹介し、試供・試食も行うことで、満足の声を多く頂いた。

優秀賞受賞「大学生ならではの地球の歩き方をガイドしよう！」

私たちの目的・目標は、京都へ来る外国人観光客に、大学生ならではの楽しみ方を提供することである。京都へ来る外国人観光客が京都を存分に楽しむことができていないのではないか、大学生ならではの楽しみ方を伝えれば、更に京都を楽しんでもらえるのではないかという問題意識に端を発し、設定した。主な活動内容は以下の4つである。①パンフレット設置場所開拓、②掲載情報選定のためのアンケート調査、③パンフレット掲載店舗開拓、④パンフレット作成。プロジェクトの大半の時間を、京都の外国人観光客向けパンフレットの作成に費やした。飲食店を中心に、約30店舗を紹介し、それらに加えて、京都や日本に関するコラム、また京都の地図などを掲載した。次に時間を注いだのは、パンフレット設置場所と掲載店舗の開拓であった。合計50近くの店舗に出向き、プロジェクトの趣旨を説明して、協力を取り付けた。パンフレットは大変好評で、約300部が観光客の手に渡った。「パンフレットの出来が良く、直ぐになくなった。」との声も頂き、達成感を感じた。

敢闘賞受賞「日本文化発信プロジェクト」

本プロジェクトは、日本文化の再発見と発信を目標とした。春学期に、日本文化紹介の動画をYouTubeで公開したが、動画が長すぎたことなどが原因で、目標の再生回数には届かなかった。秋学期には、外国人インタビューを基に、複数のSNS（Facebook, Twitter, YouTube, Instagram, Weibo）で、日本食、観光地、伝統行事を発信した。目玉企画1つ目は、日本の曲“Blessing”を外国の友人に母国語で歌ってもらい、曲を完成したことである。私たちからの一方通行の発信でなく、活動に興味を示してくれた人を巻き込んだ企画であった。2つ目に、今出川キャンパスにて、日本文化紹介のイベントを実施した。“Face to Face”で交流し、書道やけん玉など日本の文化や遊びを留学生に伝え、楽しんでもらった。自分たちで自由に案を出することができる分、方向性がつかめずに不安になることも多く、試行錯誤を重ねた。「考えすぎず、やってみる」ことでアイデアを形にした結果、個性に溢れたプロジェクトを実現し、外国の人達からも嬉しい言葉を頂いた。

「外国語活動と留学経験の語りを通して留学の素晴らしさを伝えようプロジェクト」

広い視野と心を持ち、多様性を認め合える人々の溢れる社会をつくる最初の一步として、小学生の記憶に残り、価値観を拓けることのできる国際理解の授業やイベントを行った。まず、精華台小学校の児童を対象に、異文化や様々な価値観を知り、体感してもらえよう授業を行った。さらに、ひとつの学校にとどまらず、授業外の時間も活用し、多くの小学生に深く興味を持ってもらいたいと思い、自分たちの留学経験を本にして、小学校に配る活動も行った。小学校で学年ごとに分けて、計3回の授業を行う際には、プロジェクト全体の共通の目標を踏まえ、低中高学年それぞれのレベルに合わせた小目標を設定した。小学生と近い距離で国際理解の授業を行ったことは、このプロジェクトならではの試みだったといえよう。毎回45分という短い時間で、自分たちの伝えたいことをどのように授業という形にし、様々な学年や児童に対してアプローチを行うか、授業内容とその伝達手段を考えることに尽力した。結果、海外に行くことに興味を示してくれた児童がとても多く、フィードバックでは、「海外で学びたい。」という声も多数あった。今後の彼らのグローバルな活躍に期待だ。

「世界のことを考えようー国際理解教育プロジェクトー」

精華台小学校の児童に、外国語や海外に興味を持ってもらい、留学についても知り、さらには行きたいと思ってもらう機会を提供した。具体的には、5・6年生を対象に、英語、中国語、韓国語を用いた異文化コミュニケーション体験を通して、外国語に触れてもらった。また、私たちの留学経験を紹介して、留学とは何かについて知ってもらう情報を提供した。2回の小学校訪問も成果発表会も、どちらも目玉だと考えていた。苦勞した点は、児童目線で企画することであった。また、初対面の私達とも打ち解けてもらえるように、ありふれた企画ではなく、誰もが楽しめるようなアイデアを搾り出すことに苦心した。ユニークなアイデアを出すことには苦勞したが、私たちの強みであるテンションの高さで小学生を盛り上げた。

「地域と学校をつなげようー世代を超えた異文化交流の企画と実施プロジェクトー」

私たちの活動を通じて精華町の地域の方々、またプロジェクト提携先である精華西中学校の生徒たちに外国に興味を持ち、異文化を身近に感じてもらうことが目標だった。年間の活動では、中学生と外国人留学生を京田辺キャンパスに招待して交流イベントを行い、また、Global Kitchen と題して精華町の地域の方々を対象とした料理教室を実施した。外国人参加者に講師となってもらい、「食」を通じての異文化交流の機会を設けた。さらに、プロジェクトの目玉は、提携先の精華西中学校での学校公開日に、私たちが中学生を対象に授業を行ったことである。学校公開日ということもあり、保護者や地域の方々の参加も予想されたため、中学生だけではなく、様々な年代の方々に親しみをもって異文化に触れてもらい、外国への理解を深めてもらえるような内容とした。中学生からは、「海外に興味を持つことができた。」という多くの声を頂いた。「参加者に海外へ目を向けてもらう事ができたことがプロジェクトの最大の成果である。」と、メンバー同考えている。

「留学生支援プロジェクト」

「友達の連鎖」をテーマに活動した。メンバー全員が留学経験があるという強みを活かし、それに加えて日本に留学中の人たちに留学生が抱える悩みやニーズを調査した。その結果、やはり異国での人との繋がりが帰国後も貴重な財産になると考え、人と出会える場を提供することになった。私たちが企画するイベントを通して参加者が多くの人と出会い、その後イベント外でも関係が続いていくようなきっかけをつくった。より多くの人々のニーズに合わせるため、イベントはアウトドアからインドアまで様々なものを企画し、その中でも目玉企画は、毎月一度開催した料理教室である。このプロジェクトを通して一番苦労したことは人集めであった。最初は広報に苦戦したが、最終的に Facebook グループは167人に伸び、イベントを9回開催した。目標としていた「友達の連鎖」が小さいながらも実現した。

以上が、2期生のセミナー・プロジェクトです。楽しんで頂けたでしょうか？メンバーからは、「報告・連絡・相談の大切さ」、「顧客志向を持つこと」、「大変な時こそ遊び心を忘れないこと」、「人を動かすには、自分がしんどい作業に率先して取り組むこと」、「メンバー個々の強みを生かすこと」など、常に、そして卒業後も意識したい点を学んだという声も多く挙げられました。GC 学部卒業生がこのプロジェクトでの学びも生かして、それぞれの場所で活躍することが出来ますように！

最後までお読みいただき、有難うございました！

(文責 河上 晴香)

対談

就職活動に関する悩みを解決します!!

—3回生×4回生—

このコーナーでは、「4回生が就職活動について後輩と語る」というテーマに基づき、英語コース・中国語コース・日本語コースの4回生・3回生から計6名をお招きし、対談をしていただきました。大幅な日程変更にも関わらずうまく就職活動を乗り越えた先輩方に、どのように就職活動を行ってきたのか、業界・会社選択の決め手等々、3回生が疑問に感じている事について赤裸々にお答えしていただきました。3回生からの鋭く細かい質問とそれに対する4回生からの経験を通した返答により大変興味深い内容となっています。就職活動に不安を抱いている方必見です!! ぜひお楽しみください!!

桑原 菜々美

出席者

【司会】

英語コース4回生 廣江 華蓮 (ひろえ かれん)

【コーディネーター】

英語コース3回生 桑原 菜々美 (くわはら ななみ)

【対談者】

英語コース4回生 佐藤 里奈 (さとう りな)

3回生 家志 千尋 (かし ちひろ)

中国語コース4回生 片井 美歩 (かたい みほ)

3回生 野見山 玲奈 (のみやま れな)

3回生 大木 祥敬 (おおき よしのり)

日本語コース4回生 趙 容勲 (ちょ よんぶん：韓国、男性)



廣江 : 最初に就職活動を終えた4回生からお名前とコースを教えてください。

片井 : 中国語コース4回生の片井美歩です。金融業界のクレジットカード会社で働くことになりました。

趙 : 日本語コース4回生の趙です。小売業界の会社で働きます。よろしくお願いします。

佐藤 : 英語コース4回生の佐藤里奈です。車向け半導体業界のトップの会社で働くことに決まりました。海外営業で働きます。

廣江 : この4回生に就職活動について気になることを質問してもらえればなと思います。では次に3回生の自己紹介をお願いします。

家志 : 英語コース3回生の家志千尋です。よろしくお願いします。

野見山：中国語コース3回生の野見山玲奈です。よろしくお願いします。

大木：中国語コース3回生の大木祥敬です。お願いします。

廣江：では、自由に質問してってください。

家志：どんな風に就活して、どんな風に終わったかプロセスを聞きたいです。また、どの業界を見ていたとか、どの会社を見ていたとかもあれば教えてください。

片井：私は金融全般とメーカーを見ていました。メーカーで選考が早い会社を受け、面接の練習を重ねて8月の最終面接につなげました。多くの人と同じ時期に始めて、同じ時期に終わったかなという感じです。特別早く動いていた訳ではなかったです。

趙：私は最初に自己分析を始めて、2月から会社を調べました。本に就職活動のプロセスが載っていたのでそれをマネして、自分の興味のある業界を定めてその分野の会社を調べたり、自己分析の後に会社研究で会社のリストを作り、自分に合う会社を探しました。マイナビとグローバルリーダーという留学生向けのマイナビのようなサイトに登録をしました。4月からセミナーに行ったのですが、日本人向けのセミナーよりも留学生向けのセミナーに行きました。その方が留学生を必要とする会社を知ることができたからです。5月からはエントリーをし始めました。その際に手書きのエントリーシートが多くて、3時間かけて書いたものに間違いがあって、また一から書き直しなどあって大変でした。そして8月最初に内定をいただきました。特別感はなく皆と同じ感じです。

家志：趙さんはどういう業界を見ていたのですか？

趙：業界は興味を持っていた小売業を見ていました。企業を見る際に自分なりの条件を決めて、それに合う企業を見ていていました。条件っていうのは、日本の企業であること、大阪で働ける企業であること、韓国と関わりがある企業であることの3つです。私はそこまでエントリーしてなくて、5社しかエントリーしませんでした。(笑)

一同：えー!!　すごい!!

趙：アサヒと麒麟、資生堂、ABC マート、あとは2つの百貨店で阪急と高島屋です。ちなみに全部営業で受けました。

一同：(あ然)

趙：資生堂は条件で運転免許証が必要と書いてあったので、運転免許証も取得しました。ただ、中国人に人気があるので、HSK（中国語検定）が必要だったのですが、持ってなかったので…残念でした。

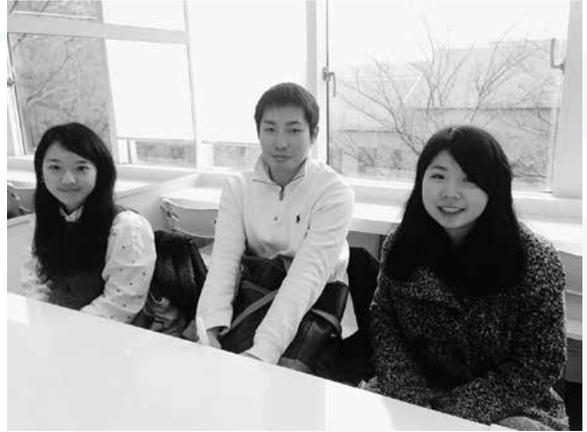
片井：運転免許証とったのに…　業界はみんな決めてるの？

家志：私は企業間取引を行う会社に興味があります。ただインターンシップは学ぶことが多々あるためさまざまな業界のものに参加しています。

野見山：私は業界をだいたい決めていて、語学が使える物流系の業界で働きたいです。でもあまりグローバル・コミュニケーション学部の内定者がいないので不安です。

大木 : 僕はメーカー、サービス業界を見えています。百貨店にも興味があります。どのように業界を決めたのですか？

片井 : 私は関心のある業界に属する会社、必ず1社は会社説明会に行っていました。そこで自分にこの業界は合わないなと思ったら選択肢から外していました。最初からやりたいことが決まっているのももちろん良いことだと思いますが、やはり最初は視野を広くしておいたほうが良いと思います。



後々必然的に受けている会社の数は減ってくるし、絶対に行きたいところがあっても、ちょっとレベル落として保険として先に内々定をもらっているほうが安心感もあるし面接の練習もできるので。そういう保険を持った上で本当に行きたいところの的を絞っていく、というスタイルが良いと思います。

趙 : 私は自分の経験から志望業界を決めました。1年半セブンイレブンでアルバイトしていたのですが、お客様と会話をしながら働くことが楽しくて自分には現場で働ける小売業が合っていると感じたので、そこにエントリーしていきました。

野見山 : インターンシップは行きましたか？いくつ行きましたか？

片井 : 3つほど行きましたね。インターンで一週間ほど行けば、大体の社員さんの雰囲気や社風がわかりました。いろいろ受けて内定もいくつかもらいましたが、結局インターンでお世話になっていたところに就職を決めました。インターンシップに行ったあとに何回も呼ばれて、そこでさまざまな社員さんに会う機会をいただいて自然とその会社のことをよく知ることができました。行きたい会社は絶対にインターンシップに申し込むべきだと思います。また、そこまで興味がない会社でも日が空いていれば行ってみたら良いと思います。そこで合う、合わないかが分かるので自分が受けたい企業とかもはっきりしてきます。

野見山 : インターンシップを申し込みたいのですが、時期的に学業と重なってしまい悩んでいます。行きたいところでもそういう風にチャンスを逃してしまうことがあるので学業との両立が難しいです。6月と早まった分すべてが前倒しになってきているので不安です。学業との両立はどうしていましたか？

片井・趙 : 休んだ…

一同 : (笑)

趙 : 特に大阪・東京でのセミナーが多かったので…

片井 : 田辺生には不便ですよ。

3回生 : 間違いありません。(笑) 田辺じゃなかったらもうちょっと融通きいたのに…

- 趙** : ただ理解してくれる教授もいますよ。欠席は欠席なので公欠にはならないですが、レポート提出を免除してくれる教授もいらっしゃるみたいです。
- 片井** : 学業との両立は難しかったです。ただ本当に行きたい会社の説明会などは学校を休んで行っていました。私は名前を覚えてもらうためにも企業にメールをよく送っていました。例えば、面談後にはすぐにお礼の連絡をいれたり、学業で日程がどうしても合わないときは参加したいことを伝えて他の日程を聞いていました。面接などの日程が重なってしまったときにも連絡をして日程調整をしてもらっていました。人事は案外名前を覚えてくれているのでメールは有効です。
- 趙** : 企業のセミナーであっても時間帯がさまざまで、どうしても参加できないときはメールをして、代わりに参加できるセミナーなどがいないか尋ねるようにしていました。予定があれば教えてくれるので、どうしても日程が合わなければメールなどで連絡するのも良いと思います。
- 家志** : 8月解禁に変わって、**実際のところ内定が決まる日はいつごろだったのですか？**
- 片井** : だいたい8月1日内定が多かった気がします。8月1日前に企業と面談などで接触していなければ内定は厳しかったです。7月が毎週面談で忙しかったです。7月後半には、「企業側も学生を絞ってきているな」という感じはありました。
- 野見山** : 何が起きても大丈夫なようにとりあえず準備はしておくべきなのですね。
- 片井** : 面談を受けて電話で翌日の面接が決まるといった、急なスケジュール変更にも柔軟に対応していくべきです。だから、5月中旬くらいには行きたい会社の順番をしっかりとつけておいて、予定を聞かれたときにすぐに返答できるようにしておくことが大切になってくると思います。特に電話での連絡が多いので電話にはいつでも出られるようにしておいた方が良いでしょう。
- 家志** : 「内々定」ってどうやって分かるのですか？
- 趙** : メールで連絡がきました。
- 片井** : メールも電話もありました。「内々定」とははっきり言われなかったこともあり、「内々定出たらどうしますか？」と、一旦「合格」であることを告げられてから「お願いします」と答えれば「内々定」が決まるというパターンもありました。8月1日の面接解禁日以前に「内々定」を匂わせてくるような、企業とのかけひきの面も多くありましたね。
- 桑原** : コーディネーターですが質問させていただきます。英語コース3回生の桑原菜々美です。「**金融業界は『あの会社は受けないで』などといった厳しい縛りをかけてくる**」と、聞いたのですが本当ですか？
- 片井** : メガバンクは縛りがきつそうでした。ただ「行きます」と言っておいて、メーカーを受けている友人も結構いましたね。金融は採用人数が多い分、断られる人数も多いから必死だと思います。
- 趙** : 金融業界は怖かったですね…。(笑)
- 桑原** : では、**エントリーシート (ES) の対策はどうしていましたか？**

趙 : ES 対策の本を見ながら練習しました。A3サイズの手書きがやっぱり大変でした… 一発で書こうとしても手が痛くなっちゃって。(笑) 修正テープも基本的には使っていなかったなので、やはり綺麗に間違えずに書くには2回~3回に分けて書くのが良いと思います。

佐藤 : インターンシップに申し込んで ES を書く練習をしていました。そこで選考に通った ES はよくできていたものと考えて、それを使用しました。興味がない会社でも倍率が高いと一般的に言われている会社にあえて出してみ、自分の ES の完成度を高めていきました。後は、ES にも色分けをしていました。「商社はアグレッシブな学生を欲しがる」、「金融はまじめな学生を欲しがる」などといった、各業界の特色と求める学生像をまとめ、それに合わせて ES の内容も変えていました。いろいろなパターンを作り溜めして USB に保存して、実際に ES を書くときはコピーをしていました。

大木 : 就活中にやっておいた方が良かったことはありますか？

片井 : テスト対策は早めにしておいた方が良いと思います。

桑原 : 証明写真は早めの方がいいですか？

片井 : もし今出さなければならぬなら早めの方がいいかも !! いつ撮りました？

4回生 : 3月 !!

桑原 : 「業界によって写真も違って来る」と聞いたのですが本当ですか？

佐藤 : 私もそういう話聞いたことがあります。私が行った写真屋さんのメイクアップ・アーティストは、「希望業界によってメイクや髪型の雰囲気を変えている」と言っていました !! やはり業界によっても雰囲気は変わってくるでしょう。

片井 : 最低限の清潔さは必要だけど、やはり内面を見ている企業がほとんどだと思うので写真についてはそこまでこだわらなくても良いと思いますよ。外面も大事ですが、やはり自分の内面や軸を大切にしておく方が良いと思います。最終的には人を見てくれたように感じたので。

佐藤 : ただ、最低限の清潔さとかは絶対に守っておくべきだと思います。特に選考が進めば進むほど、周りの学生のレベルも上がってくるので、ちょっとしたことでも気を配っておくことは大切だと思います。

桑原 : 軸は何にしていたのですか？

趙 : 私は先ほど言った3つの条件を軸にしていました。

片井 : 私は女性が長く働ける会社、そして残業が多いのは嫌なのでプライベートも充実させることができる会社を見ていました。またオン・オフのメリハリをつけている社員さんが多い会社という条件を軸にしていました。

佐藤 : 私は本音では海外で働ける会社であること、特にアメリカのシリコンバレーで働きたかったのでその点を視野に入れていました。また、これからのキャリアのために教育がしっかりしている会社、そして年収も見えていました。この3つの軸を掲げていましたね。ただ面接では、グローバルに活躍できること、自分の強みを活かせること、製品に主体的に携わることができることという3つの軸を言っていました。

家志 : 学生時代頑張ったこととして何を言っていましたか？

佐藤 : 留学のことを言っていました。やはりこの学部は珍しいらしく、企業側も留学のことを聞いてくるので、その辺に合わせていくと必然的に海外の経験を話題にすることが多かったです。私は留学中に日本の文化を教える活動をしていて、そのことなどを話していました。

趙 : 自分の頑張ったことは3つあるのですが、それを会社の特色に合わせて1つ選んで言っていました。リーダーとしての経験については、韓国人留学生の会長として1年間活動したことがあったので、そのことを話題にしました。また、大阪でコンサートを開催した際に有名人を呼んだ経験や、1人で3ヶ月間ヨーロッパ旅行をした経験などを話しました。

片井 : 私は中国留学中に友達と日中友好団体をやっていたので、文化的背景の異なる人とどうい風に活動するか、そのような人をどのようにまとめて1つの方向に持っていくかについて話していました。ただ、学生時代に頑張ったことは絶対に2つ以上聞かれるので、2つ~3つは用意しておくといいと思います。また企業のホームページに企業の求める人材像が載っていると思うので、それを研究してその像に近づけながらESを書いたり、面接を受けるのも大事です。

野見山 : 就活の楽しさと辛さの度合いを教えてください。

趙 : 最初はESを書くのも下手だし、自分が何をしたいかもよくわかっていない状況だったので、地獄のような日々を送っていました。ただしっかりと自己分析をしていく中で、自分の好きな事とできる事は別だな、など自分の中で考えがしっかりまとまってきて、その後はきつい状況から脱していきました。だから、最初は辛いことばかりでしたが、その辛さがだんだん和らいでいきました。

佐藤 : 3年生のころからインターンシップをしていて、インターンシップのころは7:3の割合で楽しさが勝っていました。しかし、5月、8月となるにつれだんだんと楽しさの度合いが減っていきました。というのも、インターンシップの時期は倍率が高い会社に受かったりして、そこでの評価も良かったので自分に自信を持っていたのですが、就職活動中を進めていく中で色々な予想していなかった壁にぶち当たりました。決定打になったのは圧迫面接でした。そこできつさが9割くらいになりました。「同志社大学なのにウチの会社受けに来たんだ、へ〜」とか、きついことを一時間くらい延々と言われ続けて、それがきっかけで就職活動が一気に楽しくなくなりました。ただ振り返ってみると、周りに支えられているということを感じたり、社会人、特に親への尊敬心も生まれたりなど、良かった点もありました。

片井 : …私は結構気楽な方だったんですよ。(笑)

一同 : (笑)

片井 : この性格で支えられていた点多くあって、しんどいと感じることも少なかったです。最初は不安もありましたが、就職活動本番だし頑張ろう、という思いで苦しさもそんなになかったです。一番辛かった時期は、内々定が出る1ヶ月前くらい前の7月ですね。企業側も学生を絞っていることが、ひしひしと感じられましたし、スケジュール的にも忙しかつたので。でも、終わってみて振り返ってみると早かったなと感じます。

4回生 : 早かったですね。

片井 : あと綺麗ごとかもしれませんが、普段お会いできないような会社の上層部の方々とお話しするという貴重な体験ができたので、きついことばかりではありませんでした。「死にそう」とかにはなりませんでしたね。(笑)



趙 : まあ、ストレス溜まったら、睡眠とかちゃんととって発散することは大事ですね!! 就活で楽しかったことが1%あるとすれば、これですね。(笑)

廣江 : 最後に GC の就活生に向けて応援メッセージをお願いいたします。

佐藤 : 就職活動が始まる前はアルバイトなどを通じて「自分には責任感がある」と思い込みがちですが、就活中に「社会への考えの甘さや責任感のなさ」など、さまざまなことに気づかされました。就職活動は辛い事だと思いますが、自分を成長させることができる場であると思うので頑張ってください。

趙 : 繰り返しになりますが、自分が行きたい企業や業界を絞ることが大切です。絞らずにバラバラだとなかなか進むことができません。早めに業界を絞ることが大事ななと思います。頑張ってください!

片井 : しんどかったときに一番支えてくれたのはゼミの存在でした。ゼミが仲良くて、ES の見せ合いやテストの協力などもゼミ全体で行っていました。合否など言いたくない情報の他にも、嬉しかったことやお祝いなども含めて、ゼミの中で隠さずに共有していました。ゼミ全体で「頑張ろう」という雰囲気があったのがすごくよかったです。就職活動は情報戦なので、誰かと協力して頑張ったほうが強くなれると思います。頑張ってください。

廣江 : これで対談は終わりです。みなさんありがとうございました。

3回生は少し緊張していたようですが、4回生は自分達の経験を包み隠さず話してくれていたように感じました。おかげで、すごく良い対談になったと思います。

自分も4回生ですが、対談を横で聞いてとても興味深かったです。特に、ゼミの仲間みんなで協力し合っていたという片井さんの話は凄く羨ましく感じました。(笑) 私はどちらかというと個人プレーで戦っていた方だったので。

就活の時期が毎年変わっていますし、そうでなくても将来を決める重大な決断を迫られる時なので、これから就活をする人は大変だと思います。自分は何も大した経験をして来なかった気がして、とてつもない虚無感に襲われたり、自分自身と真っ向から向き合わなくてはならず、苦しかったり、企業による「内々定」を出した学生に就職活動を終えるよう働きかけがあったり、努力が報われなくて落ち込んだり、いろんな経験があると思います。ただ、逃げずに頑張っていれば必ず素敵な出会いがあります。みなさんの前には「絶対に明るい未来」が待っています。それを信じて、頑張ってくださいね。

廣江 華蓮

対談

1年生対談 未来のGC生へ向けて

出席者

【コーディネーター】

英語コース4回生 廣江 華蓮 (ひろえ かれん)
中国語コース1回生 川村 茉莉子 (かわむら まりこ)
日本語コース1回生 千 藝珍 (ちよん いえじん：韓国、女性)

【対談者】

英語コース1回生 山本 舞美 (やまもと まみ)
中国語コース1回生 井上 直子 (いのうえ なおこ)
日本語コース1回生 都 受玟 (ど すみん：韓国、女性)
日本語コース1回生 陳 宇健 (たん えけん：マレーシア、男性)

入試について

山本：日本語コースの入試の仕組みを教えてください。

陳：僕の入試のタイプは私費外国人留学生入試（以下、留学生入試）というんですけど… 都さんは公募制推薦選抜入試（以下、公募制推薦入試）です。推薦はどういう風に入ったんですか？

都：私費外国人がこの学部の日本語コースに入るためには、留学生入試のⅠ期とⅡ期と公募制推薦入試の3つの方法があります。留学生入試は、EJU (Examination for Japanese University Admission for International Students: 日本留学試験、日本人学生のセンター試験のような試験) と TOEIC[®]テストなどの英語の検定試験を受けた上で、小論文と口頭試問があります。私は公募制推薦入試で入ったのですが、EJUの試験の点数と日本語学校の先生の推薦が必要でした。日本語学校から推薦を受けるためには、さらに、日本語学校の授業の出席率が重要です。



陳：そのEJUの点数の満点って、どのぐらいだった？ 450点？

都：作文を入れたら、450点満点です。公募制推薦入試でなく、留学生入試の場合は、EJUは日本語と数学と総合科目の対策が必要になります。総合科目というのは、経済、社会、政治問題など日本全体についての科目です。TOEIC[®]テストも600点くらい必要なので、なるべく早く受けておいた方がいいです。

陳：公募制推薦入試を受けるにあたって、合格点の目安とかありますか？

都：そうですね。EJUの試験は315点以上が必要です。出席率や、日本語学校の期末試験や中間試験も見られますから、良い子でいることが大事な。(笑)

廣江：後輩にアドバイスとかある？

陳：なるべく授業に出席することですかね。

都：公募制推薦入試の選考ではまあ、日本語学校に通っているのなら、出席率を高くして、日本語学校の試験もできたらちゃんと受けておいた方がいいので、試験も頑張るって... 同志社大学に入るためには、同志社大学の試験も必要なので大変です。小論文と口頭試問があるんですけど、私の場合は、小論文で2,000字書いたんですよ！1時間で。それもちゃんと準備しておいた方がいいです。けっこう難しいですから。

廣江：中国語コースの推薦選抜入試はどんな感じなの？

井上：まず、出願資格を満たしている必要があり、出願書類で志望理由書を800字ぐらい書きます。あとは、小論文や面接で、中国のこととか聞かれるので、中国のことをいっぱい調べて、対策していました。

廣江：日本語コースの小論文問題も、やっぱり、日本について聞かれるの？

都：私の小論文のテーマは、自分の国が日本と摩擦したことがあるか、でした。ちょっと微妙な話題ですが、そういうことが聞かれました。



廣江：国際問題とか、敏感になっておかないといけないんだね。英語コースの一般選抜入試はどうだった？

山本：一般選抜入試は問題を解く形式です。自分の考えを書くことはないの、やっぱり、過去問をたくさんするのが、一番大切だと思います。私は同志社が第一志望だったから、国語、英語、世界史の3教科だけに絞って勉強していたので、たくさん時間があつたんですよ。国立併願の人に比べて。だから、過去問に出てきたわからない英単語は全部覚えたいし…。アマゾンで20年分くらいの中古の過去問を探して取り寄せて、もうなんか黒ずんでる中古品とか使っていたんですけど、それが役立ったかなと思います。だから、本番もいつもの感じで解けました。

都：私も5年くらいさかのぼって、小論文を書いていました。公募制推薦入試では小論文形式が多かったので、長い文章を読んで、自分の意見を書いたり、あとはテーマについて2,000字～3,000字ぐらい書いたりしました。また、本など読んだ時に、自分の考えを持つようにした方がいいと思います。

陳：僕は留学生入試で受験したから、小論文の書き方とかは学んだことがないので、対策の仕方がまったく違うんですね。2年間ぐらい日本語学校で学んでいたの、小論文試験の対策を先生から教えてもらったことがあるのですが、やっぱり、自分の意見とかを述べるのは、すごく大切だと教わったような気がします。

授業について

井上：日本語コースの人って、みんなしゃべれるじゃないですか。日本の文学史とか文学の難しいことも勉強しているのですか？

陳：今、日本語のコースで学んでいるのは音声学などです。音声学、難しくない？

都：難しい。(笑)

陳 : 「あ、この人外国人だね」って分かるような外国人らしいアクセントを直すための授業なんです。この授業は、のどの仕組みや構造が発音の際にどういうふうに動くのかを学ぶのですが、今日はその試験でした。あれ、難しいですよ？ 子供のころから染みついているものだから、本当に難しい。授業だと意識するけど、やっぱり普段の生活だと難しいですよ。



井上 : 中国語コースでもありました。発音の授業。でも一瞬で終わりました！

廣江 : そっか。コースによって、音声学の授業の受け方も違うみたいだね。でも、どのコースにおいても基礎となる大事なことから、大変だと思うけど、しっかり頑張ってるね。応援しています。

学生生活について

山本 : 英語コース一回生の授業は、基本的に言語中心です。メインの英語に加えて、ドイツ語、フランス語、中国語の3ヶ国語のうちから1つを選択します。本当に英語が好きだったら、とても楽しく過ごせるっていう感じです。でも、2週間に1回くらいは英語のプレゼンテーションがあります。それを通じて、自分の成長が感じられるので、コースの勉強は、いろんな面で役立ったと思っています。他の学生生活の話だと、私達の学年は、たくさんバイトする人とそうじゃない人に分かれています。でも、それぞれがきちんと課題に向かって、取り組んでいるという感じです。

廣江 : やっぱり、どのコースもプレゼンは多い？

井上 : 中国語コースでも、月に1回くらいはあります。

廣江 : 英語コースだと、もっと多くない？ 週1回とか、ない？

山本 : 今は週1回くらいありますね。毎週大変やけど、そのおかげで今は原稿がなくてもアドリブで言えるようになってきたり。春学期は結構、書いたりしてないときになかったんですけど、今は原稿がなくても自分の言いたいことが言えるようになってきました。あと、授業で発表したい人はやっていいよ、みたいなボランティアがあるんですよ。みんな、しゃべれるようになりたいと入ってきていると思うので、そういうのにもっと参加したらいいと思います。私も春学期はやる気がなくて、見ている側だったんですけど、秋学期は全部参加しています。前は、英語話すのがうまくできなくて、そういうのが苦やったんですけど、今は文法がぐちゃぐちゃでも自分で発言しようとする機会が増えたから、楽しく英語を学んでいるなっていう実感があります。

廣江 : 完璧じゃなくても、しゃべろうっていう気持ちは大事だよ。

陳 : そうですね。まず自分が、そういう環境に身を置くっていうのが大事ですね。例えば、外国人も、日本語の本で、文法や漢字を学ぶだけではうまくしゃべれません。一番効率的なのは、環境に溶け込むためにアルバイトなどをすることだと思います。アルバイトをすると、しゃべらなくてはいけないので。特に、飲食店は「いらっしゃいませ」とかの接客用語も学ばなければならないので、それをちゃんと身につけて、うまく使えたらいいと思います。

山本 : 何のバイトしているんですか？

陳 : 最初、日本に来たときは日本語は「あいうえお」すら言えなかったもので、体力的なアルバイトをしていました。僕は、ヤマト運輸で荷物を運ぶ仕事をしていました。それを半月くらいやっていたんですけど、全然しゃべる機会がないので、それでやめました。それから、普通の飲食店でアルバイトに代えて、接客の経験を身につけたことがすごく役に立ちました。

廣江 : みんなバイトしている？

井上 : 一応、塾講（塾の講師）で登録しているんですけど、全然、生徒が来ない。（笑）

山本 : でも、英語コースは塾講のバイトしている人、多いですよ。ほとんど周りの友達のアルバイトは、塾講ですね。

廣江 : アルバイトしていたら、勉強との両立大変だと思うけど、どうしているの？

山本 : 私の場合は、学校終わってから、週5回バイトと、あと早朝も入っているのので、毎日、1週間ずっと働いているんですよ。毎日生活もきつきつで、課題も家に帰ってする暇ないんです。毎日、こういう空き時間とか、電車の中とか、ちょっとした空き時間、空きコマとか利用してやっています。それでも、大変ですけど、課題提出が遅れたりもしてないし、授業のボランティアも、やらなくてもいいのにやったりして。課題ができないのをバイトのせいにせずに、やっていくことが大事だと思っていて。何かのせいにせずに、いろんなことをやっていくのが大事だと思ってます。

陳 : バイト、そんなにやって、すごいですねえ！ ちなみにサークルは？

山本 : サークルは、前、入ってたんですけど、今は行ってないです。私に合わなかったかなっていうのがあったので。

陳 : それだったら、まだ両立できるかなー。私はサークル入ってないですけど、週3～週4でバイトしてます。さすがに、週5はできないですね。週5だったら、もう、宿題やる時間がないですよ。（笑）

山本 : そうなんですよ。ね。（笑）ほとんどないです。ただ、まあ、今は何とかなっているの。

陳 : いやあ、すごいな、週5。（笑）

山本 : でもまあ、自分の時間を作るのは、大事だと思いました。ただ、私は下宿生じゃなくて、通いつているのもあるので、それは助かっているところはあると思いますけど。

陳 : 一人暮らしは、長い時間経てば、慣れると思います。やっぱり、家族といるのが幸せですよ。

京田辺について

山本 : あと、受験生にとって気になるのが、京田辺のことだと思うんですけど。グローバル・コミュニケーションに入りたいけど、京田辺だして、思っている子、多いと思うんですよ。私もそうでしたし。実際、入学してから最初の1か月2か月は、サークルの新歓とかで、今出川の学生と合流して、「えー、京田辺ー？田舎ー」とか言われたりして、すごくいややったんですよ。でも、ずっと過ごしているうちに、広いし、落ち着いて過ごせるし、晴れてるとキャンパスもキレイだし。今は今出川じゃなくて、こっちに来て勉強できてすごくよかったなって思っています。最初は、京田辺いややなって思っている人は多かったと思うんですよ。正門からJR駅前に続く坂を降りても、何もないし。それでも、自然に囲まれていて、落ち着いていて、すごくいい環境やなって思います。

廣江 : みんな、今出川校地に行ったことある？

陳 : 今出川に2回行きました。1回は説明会があって。2回目は部屋を借りるに当たって、学校が保証人になってくれたので、その関係で。でも、小さかったですね、今出川は。

山本 : 受験生のみなさんには、京田辺は悪くないですよと伝えたいですね。(笑) 自分で環境になじんでいくことが、ここでも大事だと思います。京田辺は、最初は、誰でもいやだと思うんですけど、絶対、後悔しないと思うので、是非、私たちのキャンパスに！(笑)

コースについて

井上 : 中国語は、最初は挨拶くらいしか知らなくて入学していて、みんな中国語できるのになって、思ってたんです。しかし、意外とみんな勉強していなかったの、大学に入ったら不安がなくなりました。中国語が出来なくて困ることはなかったです。

山本 : それ英語コースでも、一緒です。私も入る前は、みんな帰国子女とかで、英語ペラペラかかって思ってたんです。自分はそういう環境にいたことがないから、全然しゃべれないし、リスニングも苦手で、すごく最初は不安だったんですけど、いざ入ってみると、結構みんな同じ感じ。一部の帰国子女の人は、しゃべれますけど、そんなに大きな差はないので不安はなくなりました。

陳 : でも、帰国子女の人達って、何のために入るんですか？

山本 : それは私も疑問なんですけど。(笑) でも、意外と、帰国子女の子でも、やっぱり、もう1回、いろんな国に行ってみたいという理由で入った人とか、日常会話は問題なく話せていても、やっぱりリーディングは苦手で、きちんともう一回やりたいたいという理由で入っているんじゃない？

陳 : でも、英語の文章ってホントに難しいですよ。僕も英語を10何年か学んでいますけど、普通の文章を読んでいると、本当に、頭が痛くなってくるんですよ。日本語でも、結構、文章を読む時、意味がたまにわからなくなって、間違えることが多いです。最初、大学入る前はよく「日本語うまいですよ」と言われたんですけど、しゃべるのはできても、漢字や語彙の知識も持たないといけません。

廣江 : 何かいい勉強方法はない？

山本 : 私に関しては、課題を一生懸命やることしか...

陳 : 同じです。

山本 : オープンキャンパスでも、GC 学部は課題が多い多いいって言うけど、それがあからゆるびるんですよ。だから、やらされてるんじゃないかって、留学のためにやっているって思ったら、全然苦じゃないかな、と思います。

廣江 : 私が1年の時は課題が多すぎて、自分の TOEIC[®] の勉強ができないのが、すごく嫌だったんですけど、そんなことはない？

山本 : 私は中学や高校で、ライティング、文章の書き方を全然学んでいなくて、ここに入って初めて書き方とかを知ったんですよ。毎週課題が出るんですけど、それをやっていくことで書き方が分かってきたので。それがなかったら、多分今でも書き方とかわからないままだったと思うので。だから、大変ですけど。

都 : それから、日本語コースって日本人がいないんですよね。だから、日本語うまくなりたかったら、自分からサークルとかに入ったりして、自分からどんどん日本人の友達を作っていくことが大事だと思います。

廣江 : 課題もあるけど、両方大事ということだね。

都 : そうですね。全部周りには外国人 ... 中国人や韓国人しかいないので、韓国人の場合は特に、漢字の勉強をしておいた方がいいと思います。韓国も一応、漢字を使っている国ですけど、最近どんどん漢字は使わなくなってきているので、漢字の勉強はしておいたほうが良いと思います。

最後に ~後輩へのメッセージ~

山本 : 先程から繰り返しているんですけど、この学部は、受動的じゃなくって、積極的に何でも動いていくのが大事だということをすごく感じました。

陳 : 僕にとっては、日本語コースは日本語学校に通っていた学びと違って、この学部に入ってから、プレゼンなどが結構多いので、そこで自分の言語能力を高めていけたら良いと思います。

都 : 私も繰り返しているんですけど、英語コースと中国語コースは、これからそれぞれの国に留学するんですよね。でも、日本語コースは自分の国から日本に留学しています。同志社大学に入るのには、ある程度、日本語ができなければ入学できません。自分が何もしていなくても、日本語が上手になる学生はいると思います。でも、積極的に自分がサークルや部活に参加して、日本人と接する機会を作ったら良いと思います。それから、日本で就職したい学生が多いと思いますので、1回生の時から、ちゃんと勉強して、単位をしっかりとって、就職のことまで考えて、良い成績をとった方が良いと思います。

井上 : 中国語については、中学校や高校では英語しか勉強していなくて、中国語は大学に入って勉強するまで触れてこない言語なので、初修だと不安になると思うんです。けれど、入ってみたら先生が最初から教えてくれるので、そんな不安は全然ないし大丈夫です。また、英語コースと一緒に、中国語コースでも積極的に発言することが大事です。積極性や意見を発信する力もつくと思うので頑張ってください！



来年、入ってくる後輩のことを真剣に考えた、1回生たちの対談、いかがだったでしょうか？
少しでも多くの方にとって、この記事がプラスに働くことを祈っています。
参加してくれた皆さん、ありがとうございました！

文責：廣江 華蓮
川村茉莉子
千 藝珍



GC 学部には英語コースに8つ、中国語コースには4つ、日本語コースには3つのゼミがあります。いろいろな専門分野の教授陣が持つゼミではどのような研究活動をするのでしょうか。前号に続き、ゼミを担当しておられる先生方にインタビューでお話を伺ったり、アンケートの形式でお答えをもらったりして、先生方のそれぞれのゼミへの思いを紹介するコーナーです。前号では英語コースの竹田宗継先生、玉井史絵先生、松木啓子先生、中国語コースの内田尚孝先生、中西裕樹先生、日本語コースの須藤潤先生、脇田里子先生のゼミを紹介しました。今回ご協力頂いたのは下記の4人の先生方です。

英 語コース 窪田 光男先生、長谷部 陽一郎先生、吉田 優子先生
中国語コース 唐 顥芸先生

全てのゼミを紹介できる訳ではありませんが、これからゼミを履修する皆さん、ゼミの活動とはどんなものか、また、どんなゼミがあるのか、参考にして頂けたらと思います。

担当 英 語コース 廣江 華蓮、笹野 美由紀、柴 歩実、山本 舞美
中国語コース 川村 茉莉子

英語コース



窪田 光男先生

窪田先生は、GC 学部の教授陣の一人であり、Sociolinguistics（社会言語学）がご専門です。ゼミでも同分野において、言語と性、年齢や階級の間を学習しながら、社会と言語の関係に迫ります。

ゼミの詳しいお話や先生ご自身のお考えなどについて、インタビューさせていただきました。

ゼミの内容を教えてください

社会と言語の関係について分析するというのがコンセプトです。社会と言語がお互いにどのような影響を及ぼし合っているのかを見ていきます。私たちは常に、社会から受ける圧力によって、自分の役割に相応しい言葉遣いや内容を選んでいきます。例えば、今、このインタビューでもそうです。私は私の、あなたはあなたの立場に相応しいような言葉遣いをしていますよね。家に帰って家族と話すような話し方はしていませんし、もし私がここで十二、三歳の子供のように話したら、不適切と思われる訳です。性別もそうです。女性は女性のように話すし、男性は男性のように話します。要するに、私たちには自由な選択って無いんですよ。社会の中で自分はこういう風に見られているだろうというような役割にふさわしい言葉遣いや内容を意識

的、無意識的にしてしまっているのです。反対にこっちから社会へ与える圧力もあります。『社会が変われば言語が変わる』が成り立つのであれば『言語を変えたら社会は変わる』も成り立つわけです。影響は双方向に働きあっているんですね。例えば、先程女性は女性特有の話し方をする、と言いましたが、世の女性がみなそれをやめたら、もしかしたら男性優位の社会が男女平等の状態に変わってくるかもしれないですよ。このように、こっちが言葉を変えたら社会がどう変わるかということも見ます。

ゼミのプログラムを教えてください

1年目のほとんどは教科書を使います。社会言語学の方でどんな研究がなされてきたのかを知り、自分がどんなことに興味があるかを見つけていきます。具体的に教科書で読むテーマとしては、Language and gender (言語と性)、Language and age (言語と年齢)、Language and class (言語と階級)などが挙げられます。

ゼミ生が具体的に研究するテーマとしてはどういうものがありますか？

いろんな研究があります。例えば「女子会の席と合コンの席で、社会の要求に応じて自分をどのように言語で表現するのが得か」をテーマにして、みんながどうしているかを見るゼミ生もいましたし「スポーツ選手がインタビューに答える時に世界のトップアスリートである自分というのを表現するのにどのような言葉を選んでいるか」を研究したゼミ生もいます。あとは「商品がよく売れるためにどんなネーミングをするか」を題材に選んで、名前というものが人々にどんなイメージを訴えかけているかを研究した人もいます。

言葉を使うことによって自分の存在をどういう風に社会の中で確立していくかということでしょうか？

というよりも社会から期待を受けて自分を表現するのだと思います。社会に既に確立された期待というものがあるってその期待に沿って自分を表現したほうが得なわけです。例えば、女子会の席では女子会での表現の仕方があるし、合コンの席ではその場面での表現の仕方。アスリートとしてテレビの向こうの視聴者に対して自分を表現するときに、社会はアスリートにどんな期待をしていて表現したらいいかというのを感じ取りながらしている。それを分析するというのをゼミ論でやっています。

どうしてこの研究をされようと思ったのですか？

私の大学時代の専攻は音楽だったんです。そこでは言語と関係無いことを学んでいた訳ですが、潜在的に言葉に対する興味はあったのだと思います。興味の発端は自分自身が、言葉を使った表現が苦手だということだったのではないのでしょうか。おそらくすごくコミュニケーションが上手で自分をうまく表現できる人は、そもそも言葉に興味を持たないですよ。自分自身は上手くできていなかったんで、どうしたらそんなに上手くできるのか、どうして自分は上手くできないんだろう、という風に考えを巡らせていったことが、社会言語学を研究することに繋がったのだと思います。

研究は大変ですか？

大変ではないです。研究は結局趣味みたいなものなので。ただ、仕事の中で我々は研究だけをやっているわけではないので、その中でバランスをとったり、時間を見つけたりというのが大変といえば大変ですね。ただ、私の場合は、自分の研究だけではなく、授業を教えたりしていることで楽しさを見出していると思うんですね。だから、自分のやっている仕事と研究の接点を見つけて、お互いに何か相乗効果が出るようになったら、それが一番理想的だなと思います。現実には中々そう上手く出来てないですけど。(笑)

ゼミ生に期待すること、感じて欲しいことはありますか？

いつもゼミ生と対面している時に言い聞かせているのは、ゼミ生が全員研究者になる訳ではないということです。教えていると、無意識のうちに研究者になるための指導をしてしまっていると感じることが多いのです。ゼミ生が社会に出た時、ゼミで学んだことって何になるんだろうかと考える時はあります。でもゼミでの学びと学生自身の人生の接点は、結局自分で考えてもらうしかないかなという気もします。もう一つ、悩んでいるのは、知らないほうが幸せなことを教えているのではないかということです。知らなかったら、無批判に社会を楽しく生きていけるのに、そこに目を向けさせればっかりに、自分たちは理不尽な目に遭っているなという事に気づかせてしまっているのかなと。

学生みんなに、どんな大人になって欲しいですか？

幸せに生きてってほしいなって思います。私は学生の2.5倍くらい生きてきていますが、幸せに生きるのって意外と難しいことだなと感じています。言語も社会から影響を受けていますが、幸せの定義も、社会から影響を受けていますよね。だから、自分はこの状態を幸せと感じていても、社会がそれを幸せと見ていないと感じてしまった時点でもうその人は幸せではなくなってしまうわけです。例えば、私はこの歳までずっと独身ですけど、それは自分がそうであることが楽で、自分にとってそれが幸せだからそうしているのであるんだけど、社会から「あの人は気の毒な人だ」という見方をされていると気付いてしまったら最後、幸せにはなれないんですね。だから学生には幸せになって欲しいと願っていますが、それぞれにとって何が幸せかも分からないですね。GC 一期生の卒業アルバムに、『幸せになってください。幸せの定義がわからなくなったらまた集まりましょう。』と書きましたが、本当にそう思っています。

最後に

ゼミの内容に加え、私たちへのメッセージもいただきありがとうございました。学生に幸せになって欲しいと願う窪田先生の熱いお話が聞けて、ますますこのゼミへの興味が湧いてきました。貴重なお時間をさいいただき本当にありがとうございました。

インタビュアー：廣江華蓮

文責：山本舞美



長谷部 陽一郎先生

今回、英語コースの長谷部陽一郎先生にインタビューをさせていただきました。長谷部先生は認知言語学を専門に研究されています。今回は、長谷部先生のゼミの魅力に迫っていきたいと思います。

先生の専門は、認知言語学ということですが、認知言語学のゼミでは主にどのような研究をするのですか？

一言でいうと、「言葉の背景にある心の働き」の研究です。言葉には伝える人と受け取る人の心の働きが密接に関わっています。日常の何気ない言葉であっても、つぶさに観察すると文字通りの意味の背後に様々な捉え方や視点が見てとれます。ある意味、心理学や哲学にも通じるところがある、そんな言語学の一分野が認知言語学です。私のゼミでは、3回生の春学期に認知言語学の基本を学び、秋学期にはその知見を社会の中で活かしていく方法を模索していきます。これが4年次のゼミ論執筆につながります。

先生が認知言語学に興味を持ち、研究を始めたきっかけは何ですか？

高校生の時には何よりハードロック／ヘヴィメタルに夢中でしたね。(笑) 大学の学部・学科を選ぶときも実はロックには英語の歌詞があるので…なんていう理由で文学部英文学科を選びました。なので当初は必ずしも勉強熱心ではなかったのですが、3回生の時に当時同志社の英文学科にいらっしゃった石黒昭博先生(『フォレスト』の監修者)の授業をとったことがきっかけで言語学や英語学に興味を持ち、大学院進学を決めました。学部4回生のときに石黒先生に相談に行ったのですが、そのとき読むよう勧められたのがラネカーという認知言語学の第一人者の本でした。そう考えると、ロックとの出会い、石黒先生との出会い、そしてラネカーの本との出会い、こういう色々な出会いがあって、今こうやってGC学部のゼミを担当するに至っているという訳ですね。

長谷部ゼミの魅力とは何でしょうか？また、どのように実社会に役立つでしょうか？

認知言語学で大切なのは、言語の背後にある心の働きを捉えることです。なので、日常生活の中でも、あるいは実社会のビジネスにおいても、コミュニケーションというものを深く考え、理論的に分析するのに役立ちます。例えば広告のキャッチフレーズやロゴなども重要な分析対象ですね。最近、3回生のゼミで「企業ロゴのフォントやタイプフェイスがもたらす心理的効果」についてディスカッションをしたのですが、ある学生が面白い指摘をしました。ファッション業界では同じくらいの価格帯のブランドでも打ち出したいイメージによって明朝体・セリフ系のロゴと、ゴシック・サンセリフ系のロゴが使い分けられています。概ね前者は「伝統や格式」、後者は「親近感」を含意するというのです。そうすると、同志社大学を含め、大学のロゴは結構その大学がアピールしたいイメージを反映しているみたいなんです。これはあくまで一例ですが、認知言語学の考え方は様々な分野に応用できるので、自分の将来に役立つ内容を自由に模索できることが、このゼミの魅力ではないかと思います。

ゼミ生、そして GC の学生にどんな考えを持ってほしいと思いますか？

言葉には色々な側面があります。同様に、人を含め、あらゆる物事には多面性があります。一面だけを見て決めつけるのではなく、多面性を尊重する態度を常にもってほしいと思います。

最後に、どういった学生にゼミを志してほしいか、そして一言メッセージをお願いします！

言葉、心の働き、コミュニケーション、こういった事柄について広く、そして深く考えてみたいという学生ですね。あと、コンピュータやプログラミングに興味のある人も歓迎です。好きなので。(笑)

常々思うのですが、年齢を重ねていくにつれ、様々な可能性が狭まってしまうと考えがちですよね。でも、必ずしもそうじゃない。「こうなりたい、これをしたい」と思ったらすぐ実践する姿勢が大事だと思います。皆さんは若いので、いろんな未来のイメージがあると思いますが、単なるイメージで終わらせないで実行に移し、自分の可能性を広げてほしいと思います！

あとがき

長谷部先生のお話を聞かせていただき、言語学はとても奥が深く、言葉以外のいろいろなものと密接に関わっているのだと感じ、とても興味の湧くインタビューとなりました。貴重なお話、お時間ありがとうございました！

インタビュアー、文責：柴 歩実



吉田 優子先生

吉田先生は、『理論言語学、音韻論』を専門に研究されています。言語の普遍性を追求する中で、様々な言語においてどんな音が使われていて、それが話者の状況や「文法的」な決まりによってどう変化するのか。そういった音の構造の規則性、ひいては全ての言語共通の原則を見極め、音が人間にとってどのような存在であるかという心理的実在性を追求していくことが、先生のゼミでの主な研究です。

今回は、その魅力や先生ご自身について語って頂きました。では早速インタビューへの回答を見てゆきましょう！

<ゼミではどんなことをしますか？また、その魅力を教えてください！>

私の担当するゼミでは、「言語の普遍性」、そして「アクセントと社会の関係」を追求します。そのためには個別の言語の特性を見極めないといけません。まずはじめは音声記号などの基礎的な知識を身につけて、みなさんは日本の大学の英語コースの学生ですので、英語と日本語を中心に言語の特徴を観察してゆきます。例えば各々の学生が行ってきた Study Abroad 先の英語の変種 (variety) の分析や、日本の各地方における方言マップの作成などに取り組んでいます。ゼミ論では、ハリーマニアに登場するキャラクターそれぞれのアクセントの違いと社会との関係を研究する人がいたり、アメリカやイギリスの映画やドラマの登場人物とそのアクセントを調べてその役作りの研究をする人もいます。音響分析をして発音と社会の関係を調べたり、英語の借用語の分析をしたり、と様々です。微妙な音の違いを敏感に感じ取り解明していく作業は、時に難しいですが、ゼミ生みんなで共に助け合いながら探究していきます。こういった、ワクワクも伴った『考えるトレーニング』ができる場を提供できるゼミだと思っています。将来、どんな仕事に就いても役に立つ論理的思考力をつけるんです。

そして、このゼミで得た知識や鍛えた耳は、みなさんが英語を使う上で大いに役立ちます。音の違いに敏感になることで自身の発音も改善されますし、コミュニケーションの場において飛び交う世界中の様々なアクセントにも対応できるようになり、自分に最適なアクセントを見つけてことができます。

先生が『理論言語学の音韻論』を研究し始めたきっかけは何ですか？

大学時代は英文学科にいたのですが、いろんな外国語を学ぶうちに気になったのは、人は学んだ外国語も自然と自身の母語のアクセントになってしまう、という点でした。それはどうしてなのか、要因を突き止めたいという気持ちから、更に言語を突き詰めていきたいと思うようになったのです。

もう一つきっかけがあるとすれば、それはシェイクスピア作品でしょうね。シェイクスピア研究のゼミに入っていたので、たくさんの作品に触れました。そして、そこで使われている英語と、今私たちが使っている英語との違いにとっても驚きました。時と共にこんなにも言語は変わるのか、と、ドキドキしたのを覚えています。そして更にシェイクスピアの時代の少し前に起きた大母音推移という、母音体系の変化に強い関心を持ち、それが今の私の研究につながっています。

ゼミの学生を含め GC の学生に、将来どんな人間になってほしいですか？

そうですね、私の経験からも言えることなのですが、異文化間のコミュニケーションにおいては、conflict（衝突・対立）が必ずあります。自分と相手とでは、価値観も、怒りの沸点も沸点への到達時間も異なります。その時々、相手を如何に怒らせずにその状況を解決まで導けるか。相手にも気持ちがあり、その気持ちを汲みながらどうやってお互いの言い分を擦り合わせられるか。このような冷静な心構えや判断が、とても重要になってきます。それができる人間に、是非なってもらいたいですね。これは異文化コミュニケーションだけでなく、ビジネスの場での交渉にも役立つ能力だと思います。

それとみなさんには、学びや世界中の様々な人との交流を通して『人間力』をつけてもらいたいですね。とにかく色々な人と話をし、映画や本などに触れる。そうして様々な考えやアイデアと出会い、考える材料にしてほしいです。

最後に一言！

みなさんは、今の勉強で満足していませんか？今学ばれている言語には更なる深みがあり、そしてまだみなさんが触れたことのない言語もまた然りです。みなさんはまだまだ吸収できます。イタリア語でもスワヒリ語でも、たくさん言語を学びましょう！どんなきっかけでも、どんな関わり方でも構いません。そして、それはいつ始めても遅くはありません！

あとがき

吉田先生からは、ご自身の海外での体験談も織り交ぜながらたくさんのお話をして頂きました。とても参考になるお話ばかりだったので、みなさんも機会があればまた伺ってみてください！ゼミの内容だけでなく、ユーモラスな先生ご自身のことも更に知ることができるインタビューになったと思います。

貴重なお時間をありがとうございました！

インタビュアー、文責：笹野 美由紀

中国語コース



唐 顥芸先生

唐先生は、GC 学部中国語コースの助教で、台湾文学がご専門です。今回はインタビューすることができませんでしたが、先生のご厚意で、アンケート形式にて私たちの疑問に答えてくださいました。忙しい合間を縫って私たちのためにお時間割いていただき、本当にありがとうございます。他のインタビュー記事とは若干形式が異なりますが、楽しんでいただければ幸いです。

唐先生が研究を始めようと思ったきっかけはなんですか？

日本に留学に来て、神戸大学の修士課程に入りました。その時、たまたま図書館で日本統治期における台湾の詩集を読み、とても感銘を受けました。それから台湾文学の研究を始めたのです。

ゼミでは主に何をしますか？またその魅力はなんですか？

4 回生と 3 回生のゼミでは学生たちに自分の興味のあるテーマで発表をさせて、卒業報告の作成に必要な知識と技術、例えば資料収集や研究発表の仕方などを指導します。2 回生のゼミでは文学作品を読み、中国の文学や文化、社会などへの理解が深まるように発表をさせます。

ゼミの学生を含め GC の学生に将来的にどのような人間になって欲しいですか？

常に知的な好奇心を持ち、既成概念に対して懐疑的でありながら、自ら調査し、思考する力を持つ人間になって欲しいです。

最後に一言お願いします。

悔いのないように学生生活を送りましょう。

あとがき

私たちの急なお願いにもかかわらず、快くアンケートを引き受けてくださった唐先生、きつととても温かで、親しみやすい雰囲気を出してくださる先生なのだと思います。きちんとインタビューさせていただくことができなかったことが悔やまれますが、本当に今回はありがとうございました。

協力：川村茉莉子
文責：廣江 華蓮

7. ホストファミリーや友達との関わりを通して、与えられた生活をただ過ごしているよりも、自分から楽しもうと行動した方が得られるものは大きいなど当たり前ながら実感しました。肝心の英語は正直それほど伸びていないと思っていたのですが、字幕なしの洋画を見られるようになったり、英語を話すことに対する恐怖心がなくなったりなど、十分成長できたかなとも思っています。これからもこちらで得たことを無駄にしないように、英語を学び続けたいと思います。

(文責 土居原 優希)

The University of Sussex, The United Kingdom ●●●●●●●●●●

1. 留学中の「驚いたこと」ですが、イギリスはカフェやレストラン等閉まるのが早い点です。場所によって違いはあるのかもしれませんが、基本的に23:00、もしくは24:00には店じまいです。また店内は全室禁煙が当たり前で、他のヨーロッパ諸国でも似たような傾向がみられます。つまるところ日本人の感覚で朝まで営業の居酒屋や遅くまで営業中のカフェに慣れていると外食に不便を覚えるのかもしれませんが。少なくとも僕はそこに驚きというか、勝手の悪さを感じました。まあそもそも外食はどこも高いだけで美味しくないのでないですけど… (笑) 最終的に誰かの家に集まって遅くまで騒いだり、クラブに出かけたりみたいな感じが、若者に限らず割と年配の人まで通じているような気がします。
2. ロンドンまで電車で1時間と少しくらいで、12、3ポンドあれば往復行けるので、便はかなりいいです。賑わいすぎないまでも、人々に囲まれているような環境です。マーケットが面白く、服にしろ、小物にしろ、しゃれたものがたくさんあります。
3. サセックス大学は、ブライトンという街に位置しております。ブライトンはここイギリス内でも保養地の1つとして数えられており、ショッピングを程々に楽しむことができます。例えば、洋服など、駅周辺にはいくつかの古着屋があり、値段は日本より安めです。ぼちぼち良いものが買えます。ただしサイズがでかいです…
4. 服装は、よく言われるファストファッション的なのが主流なのか、特に女性にそれを感じます。Primark という激安な量販店があり、商品の質もそこまで悪くないので、そういったところで買う人が多い気がします。
5. 僕は日本より共にやってきたUNIQLOの力を借りています。というか最終捨てていけるものが優先されるので、UNIQLOやら無印やらが役に立ちますね。UNIQLOいいですよ、スウェットとシャツをもう1セットくらい持って来ていたらよかったですかね…
6. イギリスのご飯はやはり美味しいとは言えません。なので、日本にいううちに日本の美味しいご飯を堪能しておいてください。

(文責 西山 雄登)

The University of Montana, The United States ●●●●●●●●●●

1. 驚：驚いたことは、こっちの人との温度感の違いです。寮で2人部屋に住んでいたのですが、ルームメイトがいる中で暖房をつけていたら、冬でも暑いから半袖で過ごす事も普段からあり、外で寒いのにコートも着ない人がいたり様々です。
嬉：嬉しかったことは、様々な国の友達ができただけです。もちろん、最初は友達ができるかと不安でした。でも、寮に住んでいたため寮で友達を作り、そこからどんどん友達が増え、帰国後も連絡を取りたいと思う友達が今ではいっぱいいます。英語で話すのが苦手でも、積極的に話すのが1番大切だと思います。
2. 休日はテストや宿題が多くあったので、ゆっくりできない週もありましたが、友達と遊んだりモールに行ったりしました。誕生日会などする日もありました。空き時間にはみんなそれぞれやりたいことをやっていました。
3. バス（無料）に乗って行く場所がほとんどですが、Southgate Mallという小さいモールがありました。日常生活用品は主にWalmartかTargetで買っていました。どちらもアメリカならどこでもある店です。また、食料の場合、学校から近いAlbertsonsで買っていました。夏学期の間、食堂に入るとお金がかかるのでお世話になると思います。
4. 現地で流行っていたことはアメフトでした。アメフトは日本でいう野球やサッカーのようなスポーツです。学期中に何回かあると思うので1回見に行くことをオススメします。試合が勝った日は特に盛り上がります。服装は、主にジーパン、Tシャツ、パーカーなどカジュアルな感じですが、パーティになると、みんなワンピースやカジュアルスーツなどを着ていました。冬になると、ジーパンだけでなくスウェットを履いている人もよく見かけました。
5. こっちのスタイルに合わせてジーパンを穿いていることが多かったです。たまにスカートやワンピースなど着ている時もありましたが、日本に比べると頻度は少ないです。
6. どんな友達を作るかなど、時と場合によって当然違いますが、私の場合、日本の有名な場所やちょっとした歴史上の背景などをもっと詳しく知っておけばよかったと思いました。様々な人が折り紙に興味を持ち、やりたいと言う人もいたので、折り方など知っていたら良いかもしれません。大学の授業ではわからないことがあれば積極的に質問すると思います。これは語学学校にも言えることです。テストのレビューシートなどがある場合、解いて先生に見せに行くと、間違いがある場合丁寧にわかりやすく教えていただけます。
7. 色々大変なことなどありましたが、今振り返るとSAを楽しむことができました。当然大学の授業を最初受けた時はすごく心配でした。ですが先生方やクラスメイト、時には周りにいた友達がアドバイスをくれるなど沢山支えがあったため、全ての授業を無事に終わらせることができました。これからは留学で得たことをもとに様々なことを行いたいと思います。また、自分の英語をもっともっと磨いていきたいと思っています。

(文責 土居原 優希)







2015年度卒業研究テーマ

—英語コース—

Advanced Seminar 2 ① (担当 松木啓子)

- 浅田愛梨花 Ritual Communication in Pop Culture: How Cosplayers Get Close to *Anime* Characters
- 冬木里歩 Ritual Communication in Live Performances: How is Fan Loyalty Created by Artists?
- 本間周英 Tourism Ritual: Why *Omotenashi* Attracts Tourists?
- 生坂まこ How Beauty Advisers Have an Influence on Customers by Sales Talk
- 石田和也 Comparison Between *Kokoro* Metaphorical Expressions and Heart/Mind Expressions in the Light of Their Cultural Backgrounds
- 石崎美穂 Communication of Death and Life: Funeral and Social Change
- 松井彩乃 The Multi-layered Structure of *Gion* Festival as Ritual Communication
- 御宿智夏 Changing Meaning of Marriage and Wedding Ceremony
- 永田良也 Ritual Communication in Job Hunting
- 中村遼子 Ritual Communications in Service Encounters
- 中島 豪 A Function of Alcohol in Ritual Communication: A Case of Party Encounter Among Those Who Meet for the First Time
- 西村未有 The Re-creation of Sacred Brand: A Case of Rebranding Strategy of JAL
- 大附加奈 The Structuring of Ritual Elements in *Kabuki* World: A Case of Shido Nakamura's Performance
- 田畑里紗 Why Disneyland Attracts People?
- 山元恵梨奈 Ritual Elements in NHK *Nodo Jiman*: Why Has NHK *Nodo Jiman* Been Attracting Many People Such a Long Time?

Advanced Seminar 2 ② (担当 玉井史絵)

- 東村茉莉映 Cool Japan: The Problem of Representing Japan
- 廣江華蓮 How We Get Attracted to Role-Playing Games?: Using an Example of *Final Fantasy 7* Focusing on the Similarity between the Story of Games and Our Daily Lives
- 今井優香 Perspectives on Conflict and Healing in Michael DiMartino and Bryan Konietzko's *Avatar: The Last Airbender*
- 岩本航亮 Cultural Representation of Japan and the West in Endo Shusaku's *Silence*
- 片木智子 How the Islam Is Represented in the U.S. Media
- 米谷壮司 Holden's Mental Development and His Hidden Communication Strategies in J. D. Salinger's *The Catcher in the Rye*
- 増澤拓也 The Relationship between the Description of Horror and Japanese Culture in Takashi Shimizu's *Ju-on*
- 中村雄士 A Story of Loss and Recovery of Identity in Different Culture in Sophia Coppola's *Lost in Translation*
- 太田愛美 The Mental Development of the Characters in *Howl's Moving Castle*
- 櫻川未歩 Inclusion and Exclusion Based on Cultural Differences in *Edward Scissorhands*
- 辻美咲希 Cross-Cultural Understanding and Adaptability of Children and Adults in Steven Spielberg's *E.T.: The Extra-Terrestrial*

Advanced Seminar 2 ③ (担当 吉田優子)

- 布野太一 Generational Differences in Perceptions of Internet Communication
畑山直輝 The Best Way to Teach English : The Effectiveness of Pronunciation Instruction
伊藤万莉菜 Importance of English for our Future
紺谷知美 How English Varieties in Films Affect Impressions of the Characters' Identities
クルーズダニエル忍 Distributional Analysis of Variations in the Gifu Dialect
若園るみ子 Influence of Robots on Human Society and Communication
吉見武留 Phonological Adaptation: English Loanwords in Japanese

Advanced Seminar 2 ④ (担当 長谷部陽一郎)

- 中堂優也 Analyzing Job Application Sheet through Text Mining
福原優奈 Comparison of Color Terms and the Images in Japanese and English Songs
井川賢哉 On Change of Language Motivated by New Expressions in Current Web-Based Communication
桑野あやか On Application of Cognitive Linguistics to English Education
松本昂将 Metaphors in Catchphrases and their Change with Time
中山詩子 Categorization of the Onomatopoeic Expressions in Fashion Magazines and their Application to Self-Expression
西尾和士 A Research on Cognition behind Language Change and Japanized English
凌 世同 The Method of Metaphor for Seizing the Hearts of Public: By Researching the Speech of Toru Hashimoto
佐藤雅也 Action Chain Analysis of Pseudo-Middle Constructions Based on Cognitive Grammar
竹中真央 How Typographies Relate to Perceptions?
東條貴行 How Propaganda Affects People's Thoughts and Behaviors
上野加奈 A Study on the Different Views on Love between People in Meiji Era and Heisei Era: A Comparison of Metaphors in Lyrics
山田春菜 The Process of Appreciating Art: An Analysis of Relationship among Perception, Cognition, and Experience
吉田和広 Applying the Concept of Plain English to Japanese English Education

Advanced Seminar 2 ⑤ (担当 竹田宗継)

- 前平亮祐 Communication with International Users Through User Interface of E-Commerce Website: To Convey Your Idea Well to the Customers
西川秀平 Impact of "Japanization" and Food Adaptation on Marketing Strategies of Casual Japanese Restaurant Chains in Thailand
平松 慧 Challenge of CSR with Japanese Companies: Enhancement of Stakeholder Communication and Information Disclosure
池田光太 Cross Border M & A of Japanese Company: Reasons of Failure and Countermeasures Against Mistakes
岸本健人 Importance of Active Listening for Successful Business Communication
近藤泰地 The Challenge for Japanese Multinationals in China: Securing Local Talent Through Localization and Improving Corporate Image
小阪裕里江 International Market Entry Strategy: Franchising versus Company Ownership

松原祐輔	Standardization or Local Adaptation Advertising in TV Commercials for Multinational Corporation
中川綾萌	An Analysis of Work Value by Female Workers and Its Impact on Motivation for Promotion
中村真弓	How Japanese Cultural Value Affects Their Motivation Towards Entrepreneurial Activities
佐藤里奈	Process and Challenges of Globalizing Corporate Structures of the Japanese Semiconductor Industry
下山夕貴子	Future Prediction of Globalization of Hotel Industry in Japan
多鹿有里	The Impact of Office Layout on Creativity and How Japanese Companies Should Change the Office Layout in the Globalizing Economy
玉井伸幸	Significance of Apologies in Crisis Communication for Japanese Companies Operating in the U.S.
龍口幸祐	Merit Based Performance Appraisal System as a Way of Increasing Productivity of Japanese White-collar Workers in Non-manufacturing Industries
辻明香里	The Problems of Intercultural Communication between Japanese Expatriates and ASEAN Local Employees: General Trends in ASEAN and the Case of Malaysia
柳澤 貴	Appointment of Foreign CEOs in Japan: Requirement of CEO's Overseas Experience and Adaptation of New Organizational Culture by Japanese Firms

Advanced Seminar 2 ⑥ (担当 窪田光男)

深谷菜月	The Speech Characteristics of Japanese Returnees Talking in Japanese
平野志織	Analyzing Structures of Conversations on the Radio
石井恵子	The Relationship between Usage of Personal Pronouns and One's Identity
加藤清仁	Metaphors of Spatial Time and How Western People Conceptualize Time
河上晴香	Strategic Features of Conversations among Japanese University Students
川上祥子	The Types of Speech and Personality Traits Preferred in Telephone Communication
小松愛実	The Features of Communication Style of Women in a Male Community
三田奈津子	Is Japanese Hospitality the Primary Cause Leading to the Generation of "Monster Customers"?
沼田 彩	The Influence of Naming on Convenience Store Sweets
奥雲 茜	Constructing a Sense of Community and Identity through Sign Language among Deaf People
上田祥子	Is Talking with People of the Same Sex More Comfortable?: Women's Behaviors in "Jyoshikai"
若本八千代	How Does Study Abroad Experience Affect the Recognition of Communicative Competence?
吉岡修平	Is "Akanuketeiru" Equivalent to Being Refined or Sophisticated? Defining the Concept of "Akanuketeiru"
吉崎彩芽	Defining "Jyoshi-ryoku": What Is Needed to Be a Desirable Woman in Japanese Society?

Advanced Seminar 2 ⑦ (担当 Marie Thorsten)

- 井手 遥 Why do Some People “Not Know” Global Issues?: Exploring Knowledge and International Relations through Graphic Novels.
- 河畑雄喜 The Image of the Businessperson and Japanese “Sekentei.”
- 河田遥香 Endless Conversation on the Second World War: Collective Memories in Germany and Japan.
- 中辻健吾 Astro Boy: How Do Globally Famous Artworks Miscommunicate?
- 小田中健太 Media and Government Persuasion during and after World War Two: Communicating the Japan-US Alliance.
- 和崎祥子 “Everybody should Love Japan!”: Foreigners, Nationalism and Japanese TV.

—中国語コース—

専門演習3 ① (担当 唐 顥芸)

- 黒岩徹也 中国の農民工
青木航太郎 「中華民国台湾化」と台湾人アイデンティティ－蔣経国と李登輝－
片井美歩 中国の社会保障－都市部の公的年金制度改革の行方－
河野文香 在中日本企業の人事管理－「現地化」をキーワードに－
小浦 舜 人民元の国際化
熊谷卓也 繁体字・簡体字－漢字選択の意味－
尾田麻奈未 中国IT産業の発展

専門演習3 ② (担当 内田尚孝)

- 後藤友莉 日本の頭脳流出の現状と展望－中国の頭脳流出関連政策との比較－
家田昇悟 中国インターネット企業のイノベーション研究－中国インターネット企業は海外でも通用するか－
宮崎皓子 日系企業から見た中国における化粧品市場の動向と展望
多田羅千博 中国的ユーモアの特徴とその構造－日本・ロシアとの比較研究－
井邊智子 中国対日外交の研究－パンダ外交を中心に－
小島 怜 日本の対中国パブリック・ディプロマシーの研究
水谷隆志 中国における環境意識の高まりと社会変動－環境意識の動向とNGO－
中西直文 人民元「国際化」の課題と展望－ドル・円との比較研究－
大西 遥 京劇の歴史的変遷と社会における役割の考察－京劇・歌舞伎・オペラの比較研究－
大塚悠里 訪日中国人旅行者と京都観光－日本の将来インバウンドの予測－
田中優美子 中国女性の社会的地位の実態と展望－戸籍制度改革は男女平等度の向上をもたらすか－
鶴居 隆 東アジアにおけるアニメーションおよび漫画産業の展望
堤 信一郎 現代中国におけるスポーツ体制の研究－ソ連・ロシアとの比較研究－
上山莉奈 神戸華僑と地域社会の関係をめぐる研究－神戸華僑の形成・発展と華僑団体－

専門演習3 ③ (担当 郭 雲輝)

- 藤崎泰幹 簡繁論争および漢字文化の考察－近現代中国語における言語政策を中心に－
二口あかり 日中カバーソング考察－音楽がつなぐ、人と言葉のその未来－
三浦有華 蟻族の問題を減らすためには－就職情勢からの視点を中心に－
早水麻衣 言語からみる台湾人の日本意識－台湾閩南語と台湾普通語の中の日本語から－
溝口千晶 中国における交通ネットワークの変遷－北京市を中心に、地下鉄・自動車・高速鉄道から見て－
中山萌香 グリム童話からみる日中言語表現の違い
荷輪涼花 琉球における中国文化伝播とその影響
奥田桜子 中国のサービス業における変化と原因－日本と比較して－
住吉将治 第二言語習得研究－第二言語習得に関わる要因とその特性－
東海林菜生 フランス華人のアイデンティティ－温州人コミュニティを中心に－
吉田 藍 日中食同源論－今日の健康ブーム考察－

専門演習3 ④ (担当 楊 華)

- 土井陽加里 中国女性の歴史－人格の目覚めという視点から－
森下夏実 高成鸞著『我们的国家 饮食与文化』（復旦大学出版社、2013年）の第三章「中餐
烹调与欣赏原理」（111～169頁）の翻訳
- 西河貴康 現代中国の婚姻－高度経済成長が婚姻に与えた影響－
野村七海 曹銘宗著『台湾人也不知道的台式國語』（貓頭鷹出版社、2013年）抄訳
清水大輝 アイデンティティ－台湾人のアイデンティティ－
吉田その香 孙睿著『给谁较劲』（长江文艺出版社、2010年）の第一章「北京你好」（3～34
頁）の翻訳
- 吉野真由 周振鶴・游汝杰著『方言和中国文化』（上海人民出版社、1986年）の序章（1
～14頁）および第7章「方言和民俗」（218～236頁）の翻訳

—日本語コース—

特別演習2 ① (担当 山森良枝)

孟 思堯 (モウ シギョウ)

中国語の結果複合動詞 - CAUSEが存在するかどうかに関する分析と考察 -

呉 賽 (ウ サイ)

事態選択形式の日中対照

趙 冠因 (チョウ カンナン)

日中人称代名詞の比較

周 明哲 (シュウ メイテツ)

待遇表現の日中対照 - 日中待遇表現の違いと原因 -

特別演習2 ② (担当 脇田里子)

車 恩美 (チャウンミ)

日韓の不満表現行為の対照研究

趙 容勳 (チョ ヨンフン)

日韓の公式な場面での謝罪表現

金 東柱 (キム ドンジュ)

「させていただく」の使用実態に関する研究

金 雲喬 (キム ウンキョ)

ホテルにおけるサービス日本語の研究

李 賢智 (イ ヒョンジ)

日韓のSNS上での断り方の違いに関する研究

刘 梦 (リュウ モン)

日本の高校で学ぶ中国人生徒の教育問題

鐘 田野 (シヨウ デンヤ)

日中謝罪表現の違いに関する研究

特別演習2 ③ (担当 須藤 潤)

宋 潔 (ソン キョル)

日本語話者と韓国語話者におけるフィラーの違い

陸 玉龍 (リク ギョクリュウ)

「うん」から中国語の「嗯」および话语标记词 (談話標識) の機能について

王 媛媛 (オウ エンエン)

日本語会話における「共感・一体感」について

周 林京 (シュウ リンキョウ)

「だって」の談話における効果および談話構成

編集後記

2015年は北陸新幹線開通、マイナンバー開始と新たなことが始まった年であり、ラグビーW杯3勝とめでたいニュースが生まれた一方で、世界各国でテロや空爆が多発した悲しい年でもありました。そして2016年度が始まろうとしています。日本では、世界では、何が起こるのでしょうか。皆様にはどんな変化があるのでしょうか。

グローバル・コミュニケーション学部はそのような国際情勢や異文化にアンテナを張り、世界で活躍する人へと育てる学部です。約1年のSAという貴重な機会が設けてあるだけでなく、十人十色の学生と知識と発想力に富んだ先生方がいるのも魅力です。少人数だからこそその団結力も生まれます。名前だけで選んで奇跡的に合格し、親に懇願してこの素晴らしい学部に入学したことは私にとって運命であったと感じています。ここの学部生になれたからこそ、刺激を与え合う友人ができ、学ぶことの多い授業に参加し、毎日成長することができています。

学部の魅力と学生の活躍を報告する、この*Cosmos*も5周年を迎えました。歴代の*Cosmos*を見ていくと、その良さが年々異なることに気づきます。学生像も違えば、エピソードやテーマも違います。私は、グローバル・コミュニケーション学部の良さを発信したいという気持ちで編集委員会に参加しましたが、編集活動の中で学ぶことや気づくことが多くありました。本誌を手にとって下さった皆様にも何か新たな刺激を与え、発見を促すことができたならば幸いです。そして2016年度が皆様のご活躍される年でありますよう、期待いたしております。

英語コース3回生 桑原 菜々美

*今年度は委員のメンバーが少ない中、編集委員達、頑張りました！

2015年度 *Cosmos* 編集委員会

英語コース 4回生 河上 晴香、廣江 華蓮
3回生 桑原 菜々美
1回生 笹野 美由紀、柴 歩実、山本 舞美
中国語コース 1回生 川村 茉莉子
日本語コース 1回生 千 藝珍

グローバル・コミュニケーション学会

運営編集委員会・役員会

中村 久男、吉田 優子、伊勢 晃、南井 正廣、鈴木 美紀子、唐 顥芸、脇田 里子、
楊 華

Cosmos 第5号

2016年3月15日発行

発行 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会
〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3
同志社大学グローバル・コミュニケーション学部内
Tel (0774) 65-7491 Fax (0774) 65-7069

編集 2015年度 *Cosmos* 編集委員会
グローバル・コミュニケーション学会 運営編集委員会

印刷 株式会社あおぞら印刷
〒604-8431 京都市中京区西ノ京原町15

